

# 信州大学留学生センター一年報 第2号

2000. 10 ~ 2001. 9



信州大学留学生センター

# センター創設2年目から3年目にかけて

留学生センター長 内藤 哲雄

信州大学留学生センターが平成11年4月1日に省令施設として創設され、今年で、3年目になる。何もかも初めてという段階が過ぎても、同一業務でさえ全く同じというものはなく、悪戦苦闘が続くとはいうものの、ある程度は定型化され予測が付きやすくなってきている。各学部にも留学生センターの位置付けや役割が理解されるようになった。センターの専任教官も、センター構成員としてのまとまりができ、非常勤講師との連携も強化されている。2期目を拝命したセンター長として、この3年間の経緯を自らも体験してきただけに、感慨ひとしおである。

留学生センターのこれまでの主要な刊行物は、初年度から発行されている「留学生センター紀要」と2年目からの「留学生センター年報」である。紀要は、センターの専任教官と非常勤講師、それに学部教官からの投稿があり、順調に発展を続けている。これに対して年報は、センターの業務が拡張し多様化している中で、ようやく2号目の発行にこぎつけたところである。掲載範囲は、平成12年10月から平成13年9月までである。

国立大学全体が独立行政法人化へと移行する情勢にあり、留学生センターが信州大学全体の国際交流や国際化に果たす役割を明らかにし、将来展望を模索するためにも自己点検・評価や外部評価が不可欠となってきている。本13年度には、年報に加え、自己点検・評価報告書が発行されることになっている。平成14年度には外部評価報告書の作成が予定されている。これらの点検や評価を的確に推進していくためにも、日常の事業活動をまとめて記録していく、年報の刊行を恒常的に継続しなければならない。第2号の発行は、継続の始まりである。

また、年報は、留学生センターの専任教官や非常勤講師の方々が1年間の事業活動を振り返るだけでなく、同時に、学内の各部局や事務機構に事業活動を広報し、その成果を大学の外部に問うという役割をもっている。本号には掲載されないが、平成13年10月より日韓共同理工系学部留学生事業も開始された。独立行政法人化への移行必至の状況の下、大学の国際交流や国際化に果たす留学生センターの機能の重要性が高まり、業務はますます多角化・多様化していくであろう。僅か5名の専任教官には荷が重いことであるが、一致協力して大任を果たさねばならない。センター教官が他大学の年報と比較検討するとともに、本センターの年報に対して学内外のご批判やご叱正、ご助言を賜ることで、事業活動の改善を不断に推進することを目指したい。

平成14年3月

# 目 次

## センター長あいさつ

## 目 次

<b>信州大学留学生センター教職員と業務</b>	<b>1</b>
◦ 信州大学留学生センター教職員 .....	1
◦ 信州大学留学生センター業務 .....	2
全学各種委員会 .....	2
出版・広報 .....	2
授 業 .....	2
交流・相談 .....	2
学事（行事）一覧 .....	2
<b>日本語教育</b>	<b>3</b>
◦ 日本語研修コース .....	3
平成12年度後期 .....	3
平成13年度前期 .....	6
◦ 日本語・日本事情 .....	14
◦ 日本語補講 .....	15
<b>短期留学プログラム</b>	<b>21</b>
<b>相談・指導業務</b>	<b>22</b>
<b>活動記録</b>	<b>29</b>
◦ 教育・研究シンポジウム .....	29
趣 旨 .....	29
プログラム .....	29
開会の辞 内藤哲雄（信州大学留学生センター長） .....	30
挨拶 森本尚武（信州大学長） .....	31
◦ 平成12年度後期～13年度前期信州大学留学生センター活動記録 .....	31
<b>交流事業</b>	<b>33</b>
◦ 長野県留学生交流推進協議会 .....	33
◦ 第11回留学生日本語スピーチコンテスト .....	33
日本に来て一番感激したこと 陳 妍均 .....	33
一番困ったときの思いで 関 新 .....	34
◦ 信州の留学生に本を贈る会 .....	35
◦ 『アジア』賞論文コンクール .....	35

<b>資 料</b>	<b>36</b>
◦ 留学生数	36
国別外国人留学生受入れ数	37
外国人留学生受入れ数の推移	37
外国人留学生年度別受入れ数の推移	38
外国人留学生国別受入れ数の推移	39
◦ 交流協定締結大学一覧	40
大学間協定	40
各部門協定	40
◦ 日本語研修コース修了者	41
第三期生	41
第四期生	41
◦ 信州大学留学生センター教官業績一覧	42

# 信州大学留学生センター教職員と業務

## ○信州大学留学生センター構成員（平成13年9月30日現在）

センター長（兼任）	人文学部教授	内藤 哲雄
（専任）	教授	村瀬 さな子
	教授	藤沢 文人
	助教授	上條 厚
	助教授	村田 明
	助教授	佐藤 友則
（非常勤）	講師	金子 泰子（予備教育担当）
	講師	中村 純子（予備教育担当）
	講師	下平 菜穂（予備教育担当）
	講師	合津 美穂（予備教育担当）
	講師	今村 一子（予備教育担当）
	講師	村山 啓子（補講担当）
	講師	青柳 にし紀（補講担当）
	講師	山本 もと子（補講担当）
	講師	高石 久美子（補講担当）

## 事務担当

学生部留学生課	留学生課長	平野 春吉
	留学生係長	藤本 哲生
	留学生係主任	林 康代
	留学生センター係長	林 實

## ○信州大学留学生センター業務

### 全学各種委員会

学校内共同教育研究施設等管理委員会	内藤 哲雄
	村瀬 さな子
共通教育カリキュラム企画編成・実施会議	上條 厚
総合情報処理センター運営委員会	村田 明
自己点検評価委員会授業評価専門部会	佐藤 友則
セクハラ委員会	村瀬 さな子

## ○出版・広報

- 留学生センター紀要
- |      |
|------|
| 上條 厚 |
| 村田 明 |

信州大学留学生センター紀要第2号を2001年3月に発刊

- 留学生センター年報
- |       |
|-------|
| 村田 明  |
| 佐藤 友則 |

信州大学留学生センター年報第1号を2001年3月に発刊

- 信州大学留学生センター・ニュース
- |       |
|-------|
| 藤沢 文人 |
|-------|

信州大学留学生センター・ニュース第3号を2001年1月に発刊

- 各種パンフレット 上 條 厚
- 留学生指導教官用ハンドブック 村 瀬 さな子
- ホームページ作成・管理 佐 藤 友 則

信州大学留学生センターホームページを1999年9月より開設・管理している。

#### ○授 業

- 日本語研修コース（予備教育） 佐 藤 友 則
- 日本語・日本事情 上 條 厚
- 日本語補講 上 條 厚
- 韓国からの理工系学部留学生受入 上 條 厚  
2001年10月の受入れに向けて調査・企画中
- 短期留学プログラム 村 田 明  
2001年4月、受講生を学内から募集

#### ○交流・相談

- 相談業務 村 瀬 さな子
- 交流事業 佐 藤 友 則
- 留学生担当教官連絡会 村 瀬 さな子

#### ○学事（行事）一覧

信州大学留学生センターの活動を記録する。

村 田 明

# 日 本 語 教 育

## 日本語研修コース

### ○平成12年度後期

[期 間] 平成12年10月～13年 3 月

[学習者] 10名

インドネシア	大学院研究生	信州大学教育学研究科進学	男性
タ イ	大学院研究生	信州大学工学研究科進学	女性
アルゼンチン	教員研修生	信州大学教育学部進学	男性
インドネシア	教員研修生	信州大学教育学部進学	女性
タ イ	教員研修生	信州大学教育学部進学	男性
中 国	大学院生	信州大学理学研究科在籍	男性
中 国	大学院生	信州大学医学研究科在籍	男性
中 国	大学院生	信州大学医学研究科在籍	女性
中 国	大学院生	信州大学医学研究科在籍	女性
ド イ ツ	交換留学生	信州大学人文学部進学	男性

この期より、従来の大学院入学前予備教育生および教員研修生の他に、コース定員に余裕がある限り、信州大学に在籍している私費の大学院生、研究生も受け入れることになり、4名の参加が見られた。また、マンハイム大学からの交換留学生も1名参加した。

[コース(週予定)] 2クラス

Aクラス (初級学習者対象)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①	復習①
2	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②	復習②
3	総 合	漢 字	作 文	漢 字	漢 字
4	×	ドリル	×	Tutorial	Tutorial

1コマ+2コマ 9:30～12:30 (休憩は適宜2回または3回)

3コマ 13:30～15:00

4コマ 15:10～16:40

(主 教 材)

主教材として『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』を使用した。ゼロ学習者がほとんどだったため、かなの指導から始め、コースが終わるまでに上記のテキストを修了するよう配分した。

(漢字教材)

『Basic Kanji Book vol.1』と『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字英語版』を使用した。修了後の学習者による評価では『Basic Kanji Book』のほうが評価が高かった。コース開始当初は、漢字の時間は予定になかったが、学習者および教師からの要望が高かったため、半月ほど経過した時点で漢字

の時間を設けることにした。

(総合)

日本語教育用のビデオ等を用い、聴解力養成を図った。

(作文)

『みんなの日本語初級 やさしい作文』を用い、午前の主教材の時間に学習した文法・文型を書いて定着させることを目的として指導した。

(復習)

主教材で指導した文法・文型の復習をしつつ、使えることを目的にした練習を行った。

(テスト)

平成12年度前期まで実施していた週例テストを廃止し、月例テストに移行した。これは、週例テストの負担の大きさ、文法偏重の傾向という、学習者からの意見、教師が受けた印象をもとに決定したものである。月例テストでは、その1ヶ月分の文法・文型のテスト、漢字のテスト、そして新たに会話テスト（ロールプレイ形式）を組み入れることにし、学習者の口頭能力向上の意識付けにつながるよう配慮した。また、コース修了時には、全学習項目を対象にした修了テストを実施した。これも文法、漢字、会話の3テストである。

(Tutorial)

学習者1名に教師1名がついて、学習者と相談のうえ、指導を行った。指導内容は、専門語彙の紹介、ロールプレイによる会話練習、作文による語彙・文型指導など様々である。また学習指導のみならず、精神面の相談にのったり、進学のための情報提供や資料作成援助をすることもあった。さらに、1月頃からは2月末に行われる「修了発表」のための原稿書き、資料準備等もこの時間に行うようにした。

Bクラス（初中級学習者対象）

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①	復習①
2	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②	復習②
3	総合	読解	読解	読解	作文
4		ドリル	×	×	×

(主教材)

初中級の学習者対象のため、コース開始から1ヵ月半ほどは『みんなの日本語初級Ⅱ』を利用して初級文法・文型の指導および復習を行い、『みんな』修了後は『新日本語の中級』を用いて、中級表現・語彙の指導およびロールプレイなどを用いた会話練習を行った。

(総合)

金曜日の作文の発表、ビデオを用いた会話練習などを行った。

(読解)

『楽しく読もうⅡ』を用いて、まとまった文章を読みながら、語彙・漢字の指導、読解のストラテジー指導などを行った。

(作文)

まとまった文章を書く練習をしつつ、PCのワープロ打ちの練習も行い、月曜の総合の時間に書いたものを発表するなどの展開を工夫した。

(ドリル)

この時間では、発音指導を中心に、聴解の練習も行った。発音指導は、『みんなの日本語』の会話



を事前に学習者に暗記させ、それを授業時間にロールプレイ形式で発話させて録音し、その自己評価をさせるという方法で行った。自己評価後、教師が評価し、練習させた。聴解は、主教材の学習項目に応じ、『楽しく聞こう』、『絵とタスクで学ぶ日本語』、『にほんごきいてはなして』などの聴解教材から適宜適当なものを選択して実施した。

**(テスト)**

週例テスト・月例テストを行わず、中間と修了の2回のテストを行った。

**[コース(学期予定)]**

10月初旬	学習者の受け入れ
10月10日～12日	オリエンテーション
10月13日	開講式
10月16日	授業開始
10月31日	街歩き
11月28日	11月 月例テスト (Aクラス)
11月29日	研修旅行 (妻籠ほか)
12月21日	12月 月例テスト (Aクラス)
12月23日～1月14日	冬休み
2月9日	日本人との交流パーティー
2月19日	修了テスト
2月20日～2月26日	発表の準備
2月27日	発表会
3月26日	修了式

**(受け入れ)**

学習者が松本駅に到着する日時の連絡を受け、センター教官とチューターの留学生が車で駅まで迎えに行った。その足で松本市役所に向かい、外国人登録、国民健康保険の加入申請を行った。また、市役所の保険課に行き、留学生の保険料減免申請も行った。その後、スーパーで布団その他家庭用品を購入した。信州大学留学生課に戻ってから、国際交流会館入居の書類記入をし、その後国際交流会館に向った。会館では、各施設の使い方指導を行った。約1週間後に市役所で外国人登録済証明書を手入れ後、銀行口座を開設した。

**(チューター留学生)**

チューターの留学生は、学習者の母語を解すること、信州大学の事情に通じていることなどを考慮し選考した。松本駅への受け入れ後も、買い物への同行、生活面での日本事情の指導、オリエンテーション時の通訳、コース開講後の通訳など多方面で活動している。

**(評価)**

学習者の最終評価は、このコースに関わった専任教官が判定会議を開いて行った。評価対象としたのは、各テスト結果と、通常の授業・生活面での日本語能力である。評価は、「通常のコミュニケーション能力」などの4項目それぞれにおいて、A～Dまでの四段階で行い、その評価結果は、コメントをつけて進学先の指導教官へ連絡した。

**(プロジェクトワーク)**

プロジェクトワークは、主教材で学習した文型や表現を、より実際の日本語使用場面で利用させることを目的として行った。今回は、「日本人のおしゃべりパーティー」を企画し、招待状の作成、パーティーの準備、料理の作成などを学習者主体で行った。

### (発表会)

この発表会は、コースの最後に、日本人の前で、日本語を用いて自分の国の紹介および専門について発表させるものである。この学期から、「何でも自由に発表していい」から「必ず自分の専門について発表すること」に変更された。大学院進学後、発表の機会があると思われるので、その練習のためである。この期の学習者は、医学部、理学部などかなり難易度の高い専門分野の者が多かったが、工夫を重ね、専門外の日本人にも興味を持ってもらえる内容の発表にしがあがった。発表の持ち時間はそれぞれ20分で、Microsoft Powerpoint でスライドを作成し、プロジェクタで投影しながら発表を行った。会場は旭会館3階の大会議室で、日本人・留学生の聴衆は30名ほどであった。

### ○平成13年前期

[期 間] 平成13年4月～13年9月

[学習者] 5名

フランス	大学院研究生	信州大学農学研究科進学	男性
カンボジア	大学院研究生	信州大学農学研究科進学	男性
ネパール	大学院研究生	信州大学工学研究科進学	男性
中国	大学院生	信州大学医学研究科在籍	女性
ドイツ	交換留学生	その後帰国	女性

[コース(週予定)] 2クラス

Aクラス (初級学習者対象)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	復習①	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①
2	復習②	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②
3	漢字+ $\alpha$	漢字+ $\alpha$	作文	作文	漢字+ $\alpha$
4	×	ドリル	×	Tutorial	Tutorial

1コマ+2コマ 9:30～12:30 (休憩は適宜2回または3回)

3コマ 13:30～15:00

4コマ 15:10～16:40

### (主教材)

主教材として『みんなの日本語初級I・II』を使用した。

### (漢字+ $\alpha$ )

この時間では、『Basic Kanji Book vol.1』を用いつつ、PCも利用しての漢字学習を目指した。PCの漢字CD教材およびワープロの打ち込みを通じての漢字の練習、定着を図った。しかし漢字が全く未習の学習者が多く、漢字教材の指導以外の時間は、それほど多くとることができなかった。もっとも、学習者達は各自、時間外に漢字CD教材を利用していた。

### (作文)

『みんなの日本語初級 やさしい作文』を用い、午前の主教材の時間に学習した文法・文型を書いて定着させることを目的として指導した。

### (復習)

主教材で指導した文法・文型の復習をしつつ、使えることを目的にした練習を行った。

### (ドリル)

発音指導を中心に、聴解の練習も行った。初級の学習者対象だったため、英語によるインストラク

ションを与え、自己評価も英語で行ってよいとした。

#### (テ ス ト)

3回の月例テストおよびコース修了時の修了テストを実施した。試験科目は、文法・文型、漢字、会話の3テストである。

#### (Tutorial)

学習者1名に教師1名がついて、学習者と相談のうえ、指導を行った。

#### Bクラス (初中級学習者対象)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	復習①	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①
2	復習②	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②
3	ビデオ	作文	総合	漢字+ $\alpha$	漢字+ $\alpha$
4		作文	×	×	×

#### (主 教 材)

ある程度は学習して来ている学習者のため、最初の1週間は『みんなの日本語初級Ⅰ』の復習を早く行い、その後1ヵ月半ほど『みんなの日本語初級Ⅱ』で指導した。『みんな』修了後は『新日本語の中級』で指導した。

#### (総 合)

やりもらいなど習得が難しい文型を選択して指導する、申込書の記入練習をするなどした。

#### (漢字+ $\alpha$ )

『Intermediate Kanji Book vol.1』を用いて、漢字の指導をしつつ、語彙の導入も行った。

#### (ビ デ オ)

『Situational Functional Japanese』付属のビデオを用い、日本事情に注目させつつ、そこで使われている日本語の表現、語彙、文型などを指導した。後半からは、学習者から「午前の復習が不十分なので復習してほしい」という要望があり、復習を行った。

#### (作 文)

この期では、2コマ続けて作文指導の時間にあて、十分な資料作成や準備をした後、最初からPCを用いて文章作成することにした。それぞれの時期に関心があるテーマ、「受験」「小旅行」などのテーマで書かせ、修正し、最終的には文集にまとめた。

#### (テ ス ト)

週例テスト・月例テストを行わず、中間と修了の2回のテストを行った。

[コース(学期予定)]

4月初旬	学習者の受け入れ
4月9日～12日	オリエンテーション
4月13日	開講式
4月16日	授業開始
4月27日	街歩き
5月29日	5月月例テスト(Aクラス)
6月8日	日本人との交流パーティー
6月27日	6月月例テスト(Aクラス)
6月29日	日本の伝統文化体験(お茶・生け花・書道)
7月24日	ミニ発表会
8月3日	8月月例テスト(Aクラス)
8月4日～9月2日	夏休み
9月10日	修了テスト
9月11日～9月17日	発表の準備
9月18日	発表会
9月20日・21日	研修旅行(1泊で金沢・白川郷へ)
9月26日	修了式

(受け入れ)

学習者が松本駅に到着する日時の連絡を受け、センター教官とチューターの留学生が車で駅まで迎えに行った。その後は、平成12年度後期同様の手順である。

(チューター留学生)

チューターの留学生は、通訳の他、受入時の精神的不安を和らげ、その後の日本の生活適応のために活動している。

(評価)

学習者の最終評価は、このコースに関わった専任教官が判定会議を開いて行った。

(プロジェクトワーク)

この期のプロジェクトワークは、「日本人とのおしゃべりパーティー」だけでなく、日本人へのインタビューをもとにした「ミニ発表会」、「伝統文化体験」など豊富だった。主教材指導をベースにした通常の授業のみでは、どうしてもマンネリ化しがちのため、授業の雰囲気が大きく変わるプロジェクトワークは貴重な機会になっていた。

(発表会)

この期の学習者はPCに非常に通じた学習者が多く、非常に水準の高いスライドを作成し、ビデオも駆使して発表を行った。内容は、自国紹介の後、自分の専門についてである。発表修了後、聞きに来た他学部の留学生や日本人とのディスカッションが始まるなど、非常に活気のある発表会となった。

(研修旅行)

この期まで、研修旅行は、コース期間中に日帰りで行っていたが、この期では、発表会修了後のリラックスした時期に1泊で遠くに行きたいという学習者の希望を受け入れ、参加可能な教員がついて、金沢・白川郷を回る1泊のバス旅行を行った。魚市場での買い物、食事、九谷焼工房での絵付けなど、時間が豊富なために可能になった様々な経験をすることができた。

## 1. はじめに

プロジェクト・ワークは、学習者が共同で作業を行って何かを作り上げる活動である。たとえば「自国紹介のビデオを作る」「アンケート調査を行ってその結果を壁新聞に発表する」といったような活動が考えられる。ここでは、活動は学習者主体に行われ、その中で言語の四技能が統合的に応用される。

平成13年度前期Aクラスのコースでは、教室で教師が教えるタイプの授業の他に、学習者が何らかの活動をする中で日本語を使用するタイプの授業がいくつか行われたが、そのうちパーティの開催、インタビュー・プロジェクト、専門の発表は上記の定義に当てはまる、プロジェクト・ワークであったと言える。

ここでは7月に行ったインタビュー・プロジェクトについて報告する。

## 2. 実施計画

平成13年度前期Aクラスでは、学習の到達度が予想以上に高かったため、コース開始時に予定していた主教材の進捗を途中で変更することになった。進捗変更に伴いカリキュラムに空き時間が生じ、その時間の利用についてコース担当教師間で話し合った結果、インタビュー・プロジェクトを行うことにした。

今回行ったインタビュー・プロジェクトでは、学習者自身が設定したテーマについて日本人にインタビューをし、その結果をまとめ、口頭発表する活動を通じて、1) 日本語の運用能力・コミュニケーション能力を高めること、2) 日本社会の多様な価値観の一端を認識する契機を提供することを目的とした。こうした目的のもと、プロジェクトは学習者主体で下記のとおり行われた。

- 1) 学習者自身の興味に応じ、日本人にインタビューしたいテーマを各自決定し、質問項目を考え、調査票を作成する。
- 2) インタビューを行う際に必要となる表現を練習する。
- 3) メール等を利用し、日本人にインタビューの依頼をする。
- 4) インタビュー実施
- 5) インタビュー結果をまとめる。発表を行う際に必要となる表現を学び、発表原稿を仕上げる。パワーポイントで発表スライドを作成する。
- 6) 発表のプログラム、司会・進行役、開会・閉会の挨拶役を決定し、発表のリハーサルを行う。
- 7) 発表会
- 8) フィードバック

学習者のインタビュー対象者となったのは、信州大学人文学部開講の「日本語教育実習」を受講する実習生6名及び留学生センター教官である。日本語教育実習生へのインタビューは人文学部棟の日本語教育資料室で、センター教官へのインタビューは留学生センター内で行われた。

発表会実施にあたっては、学習者が日本語教育実習生と実習指導教官に招待状を送り、留学生センター教官の他に、人文学部の日本語教育実習生と実習指導教官の参加を得た。発表会は、旅行プロジェクトについて発表したBクラスの学習者と合同で行われた。

発表会終了後に行ったフィードバックは、学習者がまず自分自身の発表について感想・反省を述べた後、他の学習者と教師から意見をもらうという方法で進められた。

## 3. 学習者に与えられたタスクとスケジュール

学習者には下のようなタスクとスケジュールが与えられ、3人の学習者はそれぞれスケジュールにしたがって、インタビューを実施し、発表会で結果を発表した。インタビュー調査とパワーポイントを使った発表は、学習者が日本語研修コース修了後、大学院で実施する可能性の高い活動であることから、タ

スタとして取り入れられた。なお、パワーポイントを使った発表はこのインタビュー・プロジェクトだけでなく、学習者が専門分野の発表をする最後の発表会でも実施された。

プロジェクトに要した時間は、インタビュー準備に3コマ、インタビューに3コマ、原稿の作成・推敲とパワーポイントによるスライドの作成に3コマ、発表会に2コマ、フィードバックに1コマ、計12コマが充てられた。当初、インタビューに2コマ、原稿作成・推敲とパワーポイントスライド作成の時間に4コマの予定だったが、センター教官へのインタビューに更に1コマ要したため、原稿・スライド作成の時間を4コマから3コマに変更して行った。

#### 学習者に与えられたタスクとスケジュール

##### 日本人へのインタビュー・プロジェクト

This is a project work. You are to work together to achieve your tasks using Japanese. Through the project, you will practice formal and informal Japanese, and will get used to using PowerPoint and reading a paper at a meeting.

Task : You will conduct a (very, very) small interview survey targeted at Japanese students and will analyze the information obtained. A はっぴょう会 ('presentation' meeting) will be held on the 24th of July, and you will present the results at the meeting.

Schedule :

7/9~7/16 Choosing the topic you will investigate.

7/16 Deciding the topic, making a survey sheet and simulating the interview. Learning how to use PowerPoint in the afternoon.

7/17 Carrying out the interview with Japanese students (= those who you met at the party). Analyzing the information in the afternoon.

7/17~7/22 Writing the presentation script and making the PowerPoint slides. You may conduct additional interviews with other students if necessary.

7/19 Revising the script. (Tutorial time)

7/23 Simulating the はっぴょう会.

7/24 はっぴょう会. Feedback.

#### 4. 学習者が選んだテーマ

学習者が選んだテーマは下記のとおりであった。

- |                             |                   |
|-----------------------------|-------------------|
| 学習者A (信州大学農学部進学 男性 フランス出身)  | 「小泉首相についてのインタビュー」 |
| 学習者B (信州大学農学部進学 男性 カンボジア出身) | 「日本の結婚制度」         |
| 学習者C (信州大学工学部進学 男性 ネパール出身)  | 「日本と外国人の相互関係」     |

## 5. 学習者の感想

プロジェクト終了後と研修コース修了後の2回に渡り、学習者たちが今回のインタビュー・プロジェクトをどのように捉えたかを把握するために、記述式アンケート調査を実施した。

プロジェクト終了後のアンケート調査は、平成13年7月31日に調査票を配布し、翌日回収した。質問文は日本語で記述し、回答は英語または日本語による自由記述としたところ、学習者全員から日本語の回答が寄せられた。

コース修了後の調査は、研修コース全体の評価に関するアンケート調査の一環として、平成13年10月にEメールによって行った。質問文は全て英語で記述し、回答は英語による自由記述とした。

以下に、学習者からの回答をそのまま転記する。但し、行替は原資料通りではない。

### 1) プロジェクト終了後のアンケート調査結果

#### ① どうしてそのテーマを選びましたか。

- ・小泉首相はとてもゆめいになりましたから、私は日本人がどう思うかあしいえてもらいたいです。(学習者A)
- ・そのテーマを日本人がとうおもうかしりたかったからです。(学習者B)
- ・今、日本にたくさんの外国人がすんでいるのとそれが日本にあたえていそうなえいきょうについてしらべたかったので、その「日本と外国人のそうごかんけい」と言うテーマをえらびました。(学習者C)

#### ② インタビューはどうでしたか。

- ・ほんとにたのしかた。いいれんしゅだと思います。でも、はじめではちょっとむずかしいです。(学習者A)
- ・いいいけんでたのしかたです。(学習者B)
- ・インタビューにきくしつもんはたくさんれんしゅうしましたからきいているときあまりもんだいがありませんでした。でもこたえのときときどきはやくて、まだしらないことばがありましたから、ちょっとむずかしかったです。(学習者C)

#### ③ 発表はどうでしたか。

- ・時間があまりありませんから、たくさんよみました。でもそのれんしゅうはいいと思います。たくさん新しいことばべんきょうしました。Lessonはときどき毎日ちょっとおなじ。そのれんしゅうはちかうので、好きてした。(学習者A)
- ・よかったです、このつきのはっぴょうはもっとよくなると思います。(学習者B)
- ・はっぴょうのれんしゅうにスライドとスクリプトだけしました。てもはっぴょうのときスクリプトをあまりみないでしたかったですからまちがいと一息つきもたくさんありました。(学習者C)

#### ④ 何か意見があれば、自由に書いてください。

- ・またこんと、すこし時間をくださってください！(学習者A)
- ・ありません。(学習者B)
- ・そのはっぴょうは日本語がよくつかえるようになってじしんをつける (build) ためにとてもたすかったとおもいます。(学習者C)

## 2) コース修了後のアンケート調査結果

The mini-project of the Interview Survey on the student teachers and its presentation in class

### Good points:

- いいれんしゅうです。(学習者A)
- Good practice. (学習者B)
- That mini-project benefitted me in several ways. First, I learn how to analyze a given topic and prepare a questionnaire. Second, I got an experience of taking interview to people in a language that I had been studying only for a few months. Third, I got an idea of how to analyze the collected data in an understandable format. The fourth, and I think the most important benefit, was that I presented the results among audience, including the teachers, trainee teachers, and other invitees. I built a lot of experience and confidence that helped me for the final presentation also. (学習者C)

### Weak points:

- not enough time to prepare the presentation (学習者A)
- Caused a lot of stresses that time, because of the time pressure, so I was not well prepared for the presentation. (学習者B)
- No (学習者C)

## 6. 考 察

学習者へのアンケート調査の結果、インタビュー・プロジェクトへの評価は概ね好評であった。それぞれ日本について興味を持ったことについてインタビュー調査をして、インタビューや発表が「いい練習」になった、「自信をつける」のに役立った、等と答えている。また、文法積み上げ式の毎日の授業よりも好きだと答えた学習者は、また「少し時間を」とってこのような活動を実施して欲しいとも述べている。これらの結果から、プロジェクトを行ったことは学習者にとってプラスだったと考えられる。

プロジェクト・ワークを実施した教師や、発表会に参加した教師も、プロジェクトを通じて学習者の運用能力が伸び自信もついたようだと感じており、特に、発表会の質疑応答の時間、学習者が聴衆の質問に最後まで答えた姿がすばらしいと感想を述べた教師もいた。

コース修了後の学習者へのアンケート調査では、3人のうち2人が発表の準備の時間が十分でなかったと指摘している。インタビューと発表の準備の時間を担当した教師も、時間が少なくて十分な支援や指導ができなかったと感じていた。プロジェクトの進め方やスケジュールに関しては、改善していく必要があるだろう。

## 7. ま と め

以上見てきたとおり、インタビュー・プロジェクトは、言語の四技能を統合的に伸ばすための活動としても、学習者が自信をつけて主体的に学習を進めるための動機づけとしても機能していた。今後もこのような活動をコースに取り入れていくことは、日本語学習にとって有益であると思われる。

今回のインタビュー・プロジェクトはコース開始時から計画に入れられていたものではなく、学習の到達度が予想以上に高かったため、進度を予定より速めて空いた時間に実施したものだ。そのため活動に必要な時間を授業時間内に確保できず、時間外の個人学習に頼ってプロジェクトを進めることになった。学習者からは発表の準備の時間が十分でなかったという声が上がっている。

今後はプロジェクト・ワークを最初からコースの中に位置づけ、計画的に実施することで、より充実したプロジェクト・ワークを実施していきたい。



## 参考文献

- 新矢麻紀子・久保るみ（1999）「入門期に行うインタビュープロジェクトー入門日本語プログラムにおける位置づけとその実際ー」『平成11年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- 倉八順子（1993）「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識・態度に及ぼす効果(1)ー一般化のための探索的調査ー」『日本語教育』80号
- 西口光一（2001）「状況的学習論の視点」青木直子・尾崎明人・土岐哲編『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社
- バルダン田中幸子・猪野尾保子・工藤節子（1988）『プロジェクト・ワーク』凡人社

## 『作文集ーカティアと張鋭ー』……………金子 泰子

第4期、中級の午後のクラスで作文の授業を担当した。学生はドイツからのカティア・ヘルブランドさんと中国からの張鋭さん。二人は、書き上げた文章を『作文集ーカティアと張鋭ー』としてまとめた。ここで、その授業を振り返ってみたい。

カティアさんも張鋭さんも初級の日本語学習を終了していたが、二人とも話すこと書くことの運用面ではまだまだ経験が必要というレベルであった。そこで、作文のクラスでは、他のクラスでの学習内容も考慮しながらなるべくいろいろなトピックについて書き慣れ、語彙の拡充を図ると共に正確な文法知識の確認と定着を目指すこととした。原則として書き手の意欲とその内容を重視し、学習スタイルもなるべく個人に合わせた。少人数だからこそできたクラス運営である。

成果は、『作文集ーカティアと張鋭ー』として結実した。指導者は学習者の書きつづる意欲を持続させることに最大限の配慮をした。そして、一度草稿ができればあとは時間の許す限り推敲過程を繰り返した。母語話者である指導者が意味の読みとれないところやあいまいで誤解が生じる部分を指摘する。どの語、どの文型が書き手の意図をもっとも正確に伝達するか、学習者との話し合いを通して一つ一つ確定してゆく。正確に伝えたいという学習者の強い意欲が辛い推敲過程をも後押しした。読み手のよりよい理解を想定しながら表現を練るこのプロセスそのものが作文のクラスであった。作文集を読み返すと、そこそこで推敲時の話し合いの様子が思い出される。

「作文集を作ろうか」と提案したのは私だが、表紙を作って体裁を整え、内容を盛り込んだのは学習者たちである。編集過程に関わったことで出来上がりへの期待感も大きくなったのではと感じている。あとは読者からの反響を待つばかりである。学習言語で文章をつづり、それが多くの読者の目に触れる形になって発行される。さらに、それに対して何らかの反響を得ることができるとすれば、それは学習者たちの大きな自信に繋がることだろう。言語の学習とは、このような形で意欲を持続させながらねばり強く継続させていくものではないかと思っている。

作文集をご希望の方は、どうぞ留学生センターまでお問い合わせください。

## 日本語・日本事情

この項では共通教育（学部学生向け）の日本語・日本事情の授業を扱うが、今回は日本語についてのみ述べる。平成12年度のことを中心に、どのように授業を行っているか述べる。

日本語の授業で開設されているのは次のとおりである。

日本語（読解中心）Ⅰ	（前期・1単位。2コマ上條担当）
日本語（読解中心）Ⅱ	（後期・1単位。2コマ上條担当）
日本語（表現中心）Ⅰ	（前期・1単位。1コマ上條担当・2コマ佐藤担当）
日本語（表現中心）Ⅱ	（後期・1単位。1コマ上條担当・2コマ佐藤担当）

それぞれの授業は2コマまたは3コマ開設されているが、学生はそれぞれの授業について、1コマのみを受講する。

まず日本語（読解中心）について見る。

この授業は読む能力とともに、聞く能力を養うことを主眼としている。読む能力を養うためとしては、読解教材を読んでいる。それは授業者が選択して、学生に与えている。一般書・雑誌・新聞から取ったもの、および自作の教材である。それらの選択に当たっては、それらを読むことによって読解能力を養うようにできること、および日本文化・社会問題について学べることを、主として配慮している。平成12年度に使った教材は次のごとくである。

- ・日本語の学習について述べたもの
- ・日本の町の発生を長野県の例を中心に述べたもの
- ・日本の食糧事情に関するもの
- ・長野県の地勢等を解説したもの
- ・俳句について解説したもの
- ・近世の俳句・短歌
- ・自然保護に関するもの
- ・日本の昔話

教材は毎年変わるが、日本文化・社会問題を学べるようにするという点は、常に配慮している。

聞く能力を養うためとしては、聴解教材を使っている。普通、テレビのニュースをそれに当てている。NHKニュースを編集した市販の教材を使うこともあるが、ほとんど自分で録画したものを使用する。ニュースとして関心ありそうなこと、なおまた生活上必要であることを、取り扱うよう心がけている。それは例えば、災害、政治上の事件等である。扱うに値すると判断される報道があった時は、ただちにそれを授業で取り上げることとし、予定を変更して授業を行っている。なお同時期に同様の内容を報じた新聞記事を、理解を深めさせるために並行して読解教材として読んでいる。平成12年度に使ったものは次のとおりである。

- ・梅雨入りのニュース
- ・地震のニュース
- ・選挙関連のニュース

この授業は日本語の能力を高めるためにある。しかし週に1コマのみの授業であるから、この授業に出席することだけで、学生の日本語能力が特別に高まるとは思えない。高めるための幾分かの助けとなり、また日本の理解に役立つようにと考えて、授業を構成している。

学生の授業に対する取り組みは様々である。単位取得のみが目当てと思われる者もいるが、内容に関心を示してよく学習する者もいる。

次に日本語（表現中心）について見る。この授業は表現の能力を高めることを主眼としている。

。上條担当の分は次のとおりである。

漢字の学習を毎回行っている。宿題として課し、1年間で常用漢字が一通り終わるようにしている。中国系学生に対しては、中国大陸で行われる字体との違いについて、特に注意している。この漢字の宿題に関して、毎回きちんと書いて提出する一生懸命な者もいる。非漢字圏の学生の中にも非常にきれいに書く人たちがいる。漢字圏の学生でも字が上手だとはかぎらない。学生の中にはぞんざいに、ただ提出という形を作るためだけに提出する者もいる。

作文の指導として、課題を決めて短文を書かせている。そのやり方は次のようにしている。まず課題に基づいて書いた例文を読む。次に学生は、それを参考として自分で作文して提出する。それを授業担当者が見て、日本語の正しくないところを訂正する。次に学生はそれを原稿用紙に書いて再提出する。その後、学生は全員の前で声に出してそれを読む。時間が許せば、それについての討論の時間を設ける。作文の課題は、四季、教育制度、行事などである。

他に作文に関して、適宜参考になるものを与えて練習させている。前後関係・因果関係の表現、引用の方法、要約の仕方、文の構成等々である。

。佐藤担当の分は次のとおりである。

平成12年度前期は、論文・レポートの書き方指導を中心に行い、『論文ワークブック』（くろしお出版）、『にほんご作文の方法』（第三書房）、『大学合格 小論文』（専門教育出版）などをもとに作成したハンドアウトをもとに授業を進めた。前半は、論文で用いられる表現・語彙の導入と練習、後半は論文の構成を指導した。2週間に1回ほどの割合で宿題を課し、書くことに慣れるようにさせた。

後期は、論文からやや離れて、ディスカッションと擬声語・擬態語の練習を中心に行った。日本人学生から3名ほどの参加者を募り、学習者を3～4のグループに分けた後、1つのグループに日本人が入って、司会をしながらディスカッションを行った。この活動は、日ごろ日本人と話す機会が多くない学習者に話す機会を与えること、話す動機を作ること、ディスカッション途中での日本語の間違いがあれば、終了後にまとめて指導することなどを目的として行った。擬声語・擬態語は、よりこなれた会話的な表現を身に付けること、話し相手の日本人が使用した際に理解できること、医療機関で自分の体調を伝えることに利用することなどを目的に指導した。『擬声語・擬態語（初級）』（専門教育出版）を中心に授業を進めた。

学習者からの評価は、前期の論文指導の方が高かった。そこで平成13年度は前期・後期ともに論文指導を行うこととした。

（この項、上條と佐藤がまとめた）

## 日本語補講

日本語補講は主として大学院生・研究生を対象として行っており、単位を伴わないものである。本学の4地区で、初級と中級、それぞれ週2コマずつ開講している。また、2001年度からSUNSを使った中上級を週2コマ開講した。

以下、2001年度前期に関して、松本地区のことを詳しく述べ、長野・伊那地区のことを若干述べる。上田地区とSUNSは今回は割愛する。

### 松本地区：

2001年度前期松本地区日本語補講は初級、中級クラスをそれぞれ水（16：20～17：50）・金（13：00～14：30）、月（16：20～17：50）・木（16：20～17：50）の週2回ずつ5月10日から7月23日まで実施した。受講対象者は、初級がゼロスタート学習者、中級がゼロスタート以外の全受講希望者である。ここでは、初級、中級それぞれについて、今期の、A. 当初授業計画、B. 授業内容、C. 授業を終えての感想の3部構成で報告する。

○初 級

- A. ①ひらがな・カタカナの読み・書き・発音・聞き取りの練習と日本語音節構造の習得：2週間でひらがなとカタカナの読み・書き・発音・聞き取りができるようにする。
- ②日本語文法の基本項目の解説及び練習：日本語研修コースのような集中的授業であるなら、構文ごとに文法解説をした上で、読み・書き・発音・聞き取りの練習を行ってその構文の十分な習得を目指すことが可能であるが、日本語補講は週2回の授業であるので、構文ごとの解説・練習では日本語についての知識が断片的になり、日本語文法の体系的側面が見えにくい。日本語文法の大枠の解説と練習を早い時期に行う。

日本語文法の大枠

動詞の種類と活用：1類、2類、3類、ナイ形、マス形、辞書形、假定形、テ形、タ形

形容詞の種類と活用：イ形容詞、ナ形容詞、テ形、動詞修飾形、假定形

助詞の種類：格助詞、とりたて助詞、接続助詞、終助詞

文体：肯定（非）過去形・否定（非）過去形それぞれに対する丁寧形、普通形

受身形と可能形：れる・られる、る・られる

- B. ①ひらがな・カタカナ表を使って、ひらがな・カタカナの読みと発音の練習を行う。
- ②絵カードを使っての単語練習を行う。基本単語、数詞、助数詞、時・数の数え方等の練習をする。
- ③自己紹介文・あいさつ文の練習を行う。
- ④こ・そ・あ・ど・上・下・前・後・右・左等の空間表現の説明と練習を行う。
- ⑤動詞の種類と活用の説明

- |            |            |            |
|------------|------------|------------|
| ◦私は行かない。   | ◦私は寝ない。    | ◦私はこない。    |
| ◦私は行きます。   | ◦私は寝ます。    | ◦私はきます。    |
| ◦私は行く。     | ◦私は寝る。     | ◦私は来る。     |
| ◦私が行けば、・・・ | ◦私が寝れば、・・・ | ◦私がくれば、・・・ |
| ◦私は行って・・・  | ◦私は寝て・・・   | ◦私は来て・・・   |
| ◦私は行った。    | ◦私は寝た。     | ◦私は来た。     |

- ⑥1日の予定の作文を行う。

7時に起きます。8時半に家を出て大学へ行きます。12時に生協でお昼ご飯を食べます。4時半に大学を出て家に帰ります。6時に晩御飯を食べます。11時に寝ます。

7時に起きる。8時半に家を出て大学へ行く。12時に生協でお昼ご飯を食べる。4時半に大学を出て家に帰る。6時に晩御飯を食べる。11時に寝る。

- ⑦丁寧形と普通形の説明と練習を行う。

- |           |              |          |            |
|-----------|--------------|----------|------------|
| ◦太郎はきます。  | ◦太郎はきました。    | ◦太郎はくる。  | ◦太郎はきた。    |
| ◦太郎はきません。 | ◦太郎はきませんでした。 | ◦太郎はこない。 | ◦太郎はこなかった。 |

- ⑧イ形容詞・ナ形容詞の変化の説明と練習を行う。

- |              |                 |                  |             |
|--------------|-----------------|------------------|-------------|
| ◦宝石は高いです。    | ◦宝石は高かったです。     | ◦宝石は高い。          | ◦宝石は高かった。   |
| ◦宝石は高くないです。  | ◦宝石は高くなかったです。   | ◦宝石は高くない。        | ◦宝石は高くなかった。 |
| ◦宝石は高くありません。 | ◦宝石は高くありませんでした。 |                  |             |
| ◦高くて難しい本     | ◦家賃が高くなる。       | ◦高ければ買えません。      |             |
| ◦私はひまです。     | ◦私はひまでした。       | ◦私はひまだ。          | ◦私はひまだった。   |
| ◦私はひまじゃないです。 | ◦私はひまじゃなかったです。  | ◦私はひまじゃない。       |             |
| ◦私はひまじゃなかった。 | ◦私はひまじゃありません。   | ◦私はひまじゃありませんでした。 |             |
| ◦ひまで退屈な日     | ◦ひまになる。         | ◦ひまならきてください。     |             |

- C. 受講生4人でスタートしたが、途中からの参加者が4人あった。途中参加者4人のうち2人はゼロスタート者であったので学期半ばで、再スタートを切らざるをえなかった。その際、最初からの参加者のうちほとんど全回出席をし、再スタート学習が無意味であると思われた2人の受講生には中級コー

スへ移ってもらった。半期をさらに半分に分けたために当初計画の半分ほどしか消化できなかったが、途中で中級コースに移った受講生にはむしろ充実した授業内容ではなかったかと思う。

授業時間が限られているので、受講生にはクラス外での自習努力がかなり必要である。漢字の読みがなかなかできないのは許せるとしても、ひらがな・カタカナに対してもいつまでもローマ字表記を求めるようなことは許すわけにはいかない。専門の授業が忙しくて欠席せざるをえないこともよくあることであるが、初級コースでは必要最低限の文法項目を説明しているので、授業を1回でも抜けるとわけがわからなくなる。重要度に応じて同じことを練習問題などで繰り返し説明するように配慮したつもりであるが、繰り返し説明は初めての説明よりもその丁寧さが劣るのは避けられない。それだけに、欠席した場合は、受講生に一層の努力をしてもらいたい。

## ○中 級

- A. ①小学校3年生習得漢字の読みと書き取り  
②日本語文法の大枠の確認（初級補講参照）  
③あげる、もらう、くれる、やる、いただく、さしあげる、くださるの解説と練習  
④構文練習と表現練習  
⑤ビデオ教材による日本語練習  
⑥使役構文の説明と練習
- B. ①授業の最初の15分、教室にあるもの、大学内にあるもの、あなたの家にあるもの、スーパーマーケットで売られているもの、さらに絵カード等を利用して単語と漢字の練習を行う。  
②動詞・形容詞活用総復習を行う。  
③テ形への変形練習：  
連続 きのご主人に会いました。 } ⇒きのご主人に会って、家を建てたとききました。  
家を建てたとききました。 }  
平行 青木さんはホテルに泊まったそうです。 } ⇒青木さんはホテルに泊まって、ハワード  
ハワードさんは旅館に泊まったそうです。 } さんは旅館に泊まったそうです。  
理由 高木さんは気持ちが悪くなりました。 } ⇒高木さんは気持ちが悪くなって、家へ帰り  
高木さんは家へ帰りました。 } ました。
- ④格助詞の説明と練習を行う。  
「が」主体：子供が疲れている。「を」対象：部屋を掃除してください。「に」位置：机の上にある。目標：東京に行く。時：4時に電話をください。「で」手段：はさみで切ってください。  
場所：大学で会いましょう。等  
いろいろな助詞の説明と練習を行う。  
「は」、「も」、「の」、「と」、「や」、「か」、「ね」等
- ⑤「は」と「が」の説明をして疑問・応答練習をおこなう：花子はどこへ行きましたか。⇒花子は東京へ行きました。誰が東京へ行きましたか。⇒花子が東京へ行きました。
- ⑥疑問文の練習を行う。  
変形練習：7時に起きます。⇒7時に起きますか。何時に起きますか。  
応答練習：2人の学習者による疑問と応答の練習
- ⑦都道府県、地方、主要都市、山、川、湖等を紹介する。  
⑧日本の四季、生活文化（衣食住）、スポーツ、芸能、産業等を紹介する。  
⑨受身形と可能形の練習と間接受身の説明と練習を行う。  
・花を飾った。      ・花は飾られた。      ・花を飾れた。  
・肉を食べた。      ・肉は食べられた。      ・肉を食べられた。  
・雨に降られた。      ・お金を取られた。
- ⑩手紙、はがきを書く練習をする。

⑪あげる、もらう、くれる、やる、さしあげる、いただく、くださるの説明と作文練習。

わたし、本、友だち⇒友だちに本をあげます。友だちに本をもらいました。

わたし、花、先生⇒先生に花をさしあげます。先生が花をくださいます。

⑫ビデオ教材「電話取り付け申し込み」、「桃太郎」を見る。

⑬いろいろな表現練習をする。

～すぎて：飲みすぎて頭が痛い。～やすい：この本は読みやすい。～にくい：これは覚えにくい  
ために：朝走るために早く起きます。のために：友だちの誕生日のためにプレゼントを買いました。  
～ぐらい：5千円ぐらいのをください。等

⑭使役構文の説明と作文を行う。

あなた、この本、わたし、見る⇒この本を見せてください

わたし、うちの山本、行く⇒うちの山本に行かせます。

⑮複文の「と」の説明と練習を行う。

太郎は合格すると思います。太郎は合格したと聞きました。

⑯「～て、～」、「～と、～」の説明と作文練習を行う。

家に帰って、昼ご飯を食べます。家に帰ると、食事の用意ができていた。

C. 中級クラスでは、できるだけ多くの表現練習をしようと思っている。補講終了後の受講生の意見によると、この目標は大体達せられたと思う。ただし、授業内容の④⑥⑦⑧⑨⑩は初級クラスで実施する予定であったものが、初級クラスを再スタートさせたためにできなくなり、初級クラスから中級クラスへ移ってきた受講生のためにも、中級クラスでせざるをえなくなったものである。しかし、元々から中級クラスにいた受講生も含めて大方の受講生は、補講終了後、授業内容には満足したと述べていたので、これらの内容は中級クラスでも取り上げるべきものなのであろう。

教材の内容が難しかったという意見が多かったが、これは既存のテキストを使わずに授業ごとにハンドアウトを用意して授業を行ったため、テキストに掲載されている文法上の説明を利用できなかったためであると推察される。これに関しては、教師が行ういろいろな説明を聞き取ることが、実用日本語習得にとって重要な要素であると信じているので、これからの補講の実施においても続けていきたいと思っている。

## 長野地区：

長野地区の日本語補講は工学部キャンパスで開講され、教育学部の学生もそこで受講している。

### ○初 級

受講者は、最後まで続けたのは1名（工学部）のみであった。

開講式では4名の希望者（中国2、インドネシア1、ベトナム1）がいたが、ゼロ学習者がいたので、初級ということもあり、ひらがな・カタカナから始めたところ、中国からの研究生はもう国でも勉強してきているとのことで中級に移った。残った2名のうちゼロ学習者のベトナム人が時間の都合で来られなくなり、最終的にインドネシア人のみが残り、最後まで1対1の授業をした。

教材は次のとおり。

主教材：『みんなの日本語』

副教材：『新文化初級日本語Ⅰ』『よくわかる日本語』『みんなの日本語標準問題集』『ヤンさんと日本の人々』（ビデオ教材）『たのしく聞こう』（聴解用教材）など。

授業の様子は次のとおり。

学習者にとって日本語は、本人の日常生活で必要であり、また小学生の長女を筆頭に3人の子供がいるため子供の学校教育の現場での日本語の必要度も高く、大変熱心に学習に取り組んだ。授業は毎回1課のスピードで進んだ。学習者は外国語（英語）の学習経験があり、理解力も高かったためこのスピードでもほとんど問題がなかった。教科書を中心にテープ教材やビデオ教材を適宜使って進めた。後半で

は、ビデオもスキットによっては聞き取れる部分が多くなり、とても喜んでた。毎回教科書に附随した標準問題集から、その日に学習した課の復習テストを宿題として渡した。次の授業の最初に一緒に答え合わせをして確認をした。このようにして1課から20課まで学習した。

学習者が1人で、その人に高い動機付けがあり、話題もたくさんあったりしたので、毎回楽しく授業ができた。

## ○中 級

受講登録者数は、下記のとおりであった。

工 学 部 8名 (中国7、マレーシア1)

教育学部 7名 (中国2、インドネシア3、アルゼンチン1、タイ1)

開講時に受講希望者に対して記述式のニーズ調査を行った結果、日本語補講を受講する理由として「研究に必要なだから」と答えた学生が、15名中13名と最も多かった。具体的には、9名(うち7名が工学部の学生)が「日本語で研究論文・レポートを書ける」ようになることを望んでいることが分かった。この他、「自然な発音・イントネーションで話す」(8名)、「自分の専門の講義・ゼミを聴く」(7名)、「自分のゼミで発言する」(6名)、「教科書・専門書を読む」(6名)といったニーズも高いことが分かった。

そこで、今年度の中級の指導目標を、円滑な言語コミュニケーションを支える口頭表現能力・聴解力、及び、専門への橋渡しを目指した基礎的読解力・作文力の育成を図ることとした。

前期は下記の教材を使用し、口頭表現と作文の指導を中心に行った。また、学習者の要望により、漢字学習の時間も取り入れた。使用教材は次のとおりである。

月曜日：加納千恵子他(1989)『BASIC KAJIJI BOOK vol.2』

筑波ランゲージグループ(1991)

『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE vol.1・2』

筑波ランゲージグループ(1996)

『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE ビデオvol.1・2』

金曜日：佐藤政光他(1994)『表現テーマ別にほんご作文の方法』

後期は次の教材を使用する予定である。(授業曜日を変更する)

火曜日：荒井礼子他(1991)『テーマ別中級から学ぶ日本語』

金曜日：加納千恵子他(1989)『BASIC KAJIJI BOOK vol.2』

佐藤政光他(1994)『表現テーマ別にほんご作文の方法』

## 伊那地区：

### ○初 級

学生数は7名(ただし変動が時々ある)である。教材は次のとおりである。

主教材：『新文化初級日本語Ⅰ』

副教材：ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』(ワークブックも使用)

『毎日の聞き取り50日 上・下 初級編』

『スーパーキット』・『スーパーキット2』

授業内容において、ひらがな・カタカナの読み書き、挨拶、数字(時計・値段・助数詞)などの初級文法を学習し、日常生活に必要なコミュニケーションができることを目指している。

初級は学生の出入りが激しく、しかもレベルの差があるので、機械的に教科書を進めていくのではなく、出席した学生にニーズに合わせて授業を行っている。

5月のスタート時点では、ひらがな・カタカナの読み書きの練習を並行しながら、教科書に沿って挨拶・数字を学習していった。日本語学習歴がまったくゼロの学生もいたので、ロールプレイやゲームな

どをしたり、発話練習に時間をかけるようにした。初級文法がかなりできる学生もいるが、できない学生に教えてあげるなど、クラスの雰囲気がとても良く、和気あいあいとしている。

『毎日の聞き取り50日』の第4課まで進んだが、それ以上は文法が複雑になるので、その後はビデオ『見る・聞く・話す』とワークブックをメインに授業を進めている。『新文化初級日本語Ⅰ』も使用しているが、漢字圏以外の学生（バングラディッシュなど）にとっては使いづらいようである。特に伊那地区の初級クラスは中国の学生が多いので、どうしても非漢字圏の学生は読み書きのスピードに差が出てしまうため、ビデオ学習の方が楽しそうである。

初級の学生はみなとても熱心で、彼らの進歩には目を見張るものがある。特に日本に滞在しているせいか、会話力は日に日に上達している。日本の文化にも興味を持っているので、時には教科書から離れて学生の疑問に答えたり、学生の国の文化と比較したりすることもある。また、日常生活で不思議に思ったことや分からなかった単語などを話題にし、発展させて関連語句を学習したりする時もある。このように教科書の学習内容にとらわれないで、学生のニーズに合わせて自由に授業を進めている。

## ○中 級

学生数は7名（ただし変動が時々ある）である。教材は次のとおりである。

主教材：『新文化初級日本語Ⅱ』

副教材：『楽しく読もうⅡ』

ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』（ワークブックも使用）

『毎日の聞き取り50日 上・下』

『スーパーキット』・『スーパーキット2』

『初級で読めるトピック25』

授業において、漢字の読み書き（漢字圏と非漢字圏と分けて実施）を学習し、円滑なコミュニケーションができることを目指している。

中級クラスは昨年度初級クラスから持ちあがりの学生が3名、新規の学生が5月から2名であるが、初級と掛け持ちで受講している学生も4名いるので賑やかなクラスである。掛け持ちしている初級レベルの学生と中級の学生のレベル差はあるが、中級の学生のレベルに合わせて授業を行っている。

学生の要望に答えて漢字学習を行っているが、非漢字圏の学生と漢字圏（中国）の学生とは別の教材を用いて指導している。文法学習は教科書を中心に進めているが、練習問題として他の教科書から抜粋して使用することもある。リスニング力をつけるため、毎回『毎日の聞き取り50日 上・下』を行っている。そこで聞き取れなかった単語や関連語句の説明をしっかりと行って、語彙力を増やしている。また読解力をつけるために『初級で読めるトピック25』を抜粋して取り上げている。漢字圏と非漢字圏の学生では読む力に差があるが、非漢字圏の学生も刺激を受けて意欲的である。作文は留学生センター主催の日光旅行や帰国した学生に手紙を書くなど、できるだけ身近なテーマを取り上げて書かせている。また、ビデオ『見る・聞く・話す』を用いて文法学習と附随して、切符の買い方や市役所での書類の請求の仕方など日常生活に必要なことを学習することもある。

中級クラスの学生はみな熱心で、よく質問をしてくるし、話すことが好きな学生が多いので、なるべく発話する機会を増やすようにしている。新規の学生は他大学や他の機関で日本語を学習した経験があり聴解力も文法力もかなりあるので、語彙力を増やしたり、少し難しい問題を解かせたりして有意義なクラスにするよう心がけている。

（この項、松本地区は村田が執筆。長野・上田地区は担当の今村・合津・高石・山本の原稿を基に上條がまとめた）



## 短期留学プログラム（短プロ）

信州大学は、『世界の多様な文化・思想の交わる場所であり、それらを理解し受け入れ共に生きる若者を育てます』の理念を掲げ、『諸外国から学生・研究者を積極的に受け入れ、世界に開かれた大学とし、信州の国際交流の大きい推進力となります』の目標の下、留学生センターが中心となって、全学的に短期留学生への英語による授業の実施を留学生センター運営委員会などで検討してきました。平成13年度春学期から学内措置とはいえ、正式に短期留学プログラムが開始されました。

信州の特色を授業に反映させたいという願いから、授業科目総称を『信州の環境と国際交流』として、全学に短期留学プログラムの授業計画を立てて頂くようお願いし、提出いただいた計画案を整理した結果、次に示されている短期留学プログラム授業科目表ができました。

学 部	担 当 教 官	授 業 料 目 名	開講時期
理 学 部	佐藤 利幸 他	日本の生態系入門	前 期
留学生センター	内藤 哲雄	ジェスチャーの日英比較	前 期
留学生センター	上候 厚	日本の歴史と文化	前 期
留学生センター	佐藤 友則	日本語の発音および会話	前 期
留学生センター	村田 明	日本語と日本文化	前 期
留学生センター	中村 純子	日本を旅するための日本語	前 期
医 学 部	小宮山 淳 他	今日の日本の医療	夏休み集中
農 学 部	萩原 素之 他	信州における農林業	夏休み集中
人 文 学 部	井上 逸平	日本と日本語のコミュニケーション	後 期
教 育 学 部	徳井 厚子 他	「小学生との体験授業」	後 期
理 学 部	三宅 康幸 他	日本の地質 (Geology of Japan)	後 期
工 学 部	アサノ・デイビッド 他	長野における工業と技術	後 期
織 維 学 部	森川 陽 他	信州の環境と国際交流	後 期
留学生センター	村瀬さな子	日本人のライフスタイル	後 期
留学生センター	藤沢 文人	日本語	後 期
留学生センター	中村 純子	言語行動の文化的相違	後 期

2001年春学期は受け入れ態勢が不十分であるということで、学内から受講生を募集したところ、延べ8人の受講希望者がありました。

授 業 科 目	受 講 者 数
ジェスチャーの日英比較	1
日本語の発音および会話	1
日本語と日本文化	2
日本を旅するための日本語	4

授業計画を立てていただいたけれども、受講生が集まらなかったために開講できなかった授業があります。短プロ授業実施のための現体制化ではこのような状況も致し方ないと思われます。

# 相 談 ・ 指 導 業 務

## 1. はじめに

信州大学留学生センターは、平成12年9月から実質上の発足後2年目を迎えることになった。手探りで過ぎた1年目を経て、2年目は、本大学の問題点を解決し、本大学の特色を生かした独自の留学生センターを形成するための、基礎固めの年度と位置付けられた。

また相談・指導業務では、留学生課との連携が欠かせないが、平成13年には、留学生課の人事で大幅な異動が行われた。林留学生課長と松崎主任の後任として、平野留学生課長と林泰代氏が、新しく赴任となった。

## 2. 信州大学留学生センターの相談・指導業務の特色

信州大学は、5キャンパスに8学部が存在するという、いわゆる‘たこ足’大学であり、各キャンパスは、広い県内にそれぞれが遠く離れて存在している。‘たこ足大学’なるがゆえに、遠隔会議システムが早くから発達しており、その方面では先駆的な存在ではあるが、こと相談・指導業務となると、当然のことながら、そういった遠隔会議よりはるかにデリケートな対応が求められる。留学生センターにも、内線電話を利用した専用のテレビ電話を設置し、有効利用を図っているが、やはり基本は、対面しての相談・指導である。

一方、留学生センターというからには、信州大学全体の留学生のセンターであるべきである。‘たこ足’大学でさえなければ、至極当然のことであるが、信州大学のように遠隔地にわたるキャンパス間で、公平に相談・指導業務を行おうとすると、各キャンパスを巡回訪問して相談・指導業務を行うことになる。

そこで留学生センターでは、センター教官が月に一回、旭キャンパス（松本市）以外の各キャンパスに出向き、相談・指導業務を行っている。また当センターでは、5教官全てが日本語教育も相談・指導業務も担当することになっているが、精神科医師である村瀬教官が、相談・指導業務の責任者として、特に困難なケースを含む相談・指導業務の全てにおいて指導的役割を担っている。

表1に、平成13年度の訪問相談・指導業務のスケジュールを示す。

表1 平成13年度 各学部訪問スケジュール

	教育学部／工学部	農 学 部	織 維 学 部
4 月	藤 沢	村 瀬	村 瀬
5 月	村 瀬	村 瀬	藤 沢
6 月	村 瀬	藤 沢	村 瀬
7 月	上 條	村 瀬	村 瀬
8 月	村 瀬	村 瀬	村 田
9 月	村 瀬	上 條	村 瀬
10 月	村 田	村 瀬	村 瀬
11 月	村 瀬	村 瀬	佐 藤
12 月	村 瀬	村 田	村 瀬
1 月	佐 藤	村 瀬	村 瀬
2 月	村 瀬	村 瀬	上 條
3 月	村 瀬	佐 藤	村 瀬

## 3. 信州大学留学生センターの相談・指導業務の実際

○大学本部、および留学生センターや4学部のある松本市旭キャンパス

①留学生センター

5 教官それぞれが、週に一日、オフィスアワーを担当している（表2）。しかし、実際には、オフィスアワーだけに限らず、随時相談に応じている。対象は、旭キャンパスの留学生にとどまらず、信州大学に在籍する全ての留学生およびその関係者である。

表2 留学生センター教官オフィスアワー一覧表  
Office hours for general advising, Japanese language clinic  
and mental health consultation

月曜日 Mon. 2 時限目 10:40~12:10	村田 明 Murata Akira	☎0263-37-3226 内線 811-7326 amurata@gipac.shinshu-u.ac.jp
火曜日 Tues. 2 時限目 10:40~12:10	村瀬さな子 Murase Sanako	☎0263-37-3224 内線 811-7324 muras-s@gipac.shinshu-u.ac.jp
水曜日 Wed. 2 時限目 10:40~12:10	藤沢 文人 Fujisawa Fumito	☎0263-37-3128 内線 811-7328 ffumito@gipac.shinshu-u.ac.jp
木曜日 Thur. 2 時限目 10:40~12:10	佐藤 友則 Sato Tomonori	☎0263-37-3227 内線 811-7327 tomo@gipac.shinshu-u.ac.jp
金曜日 Fri. 3 時限目 13:00~14:30	上條 厚 Kamijo Atsushi	☎0263-37-3225 内線 811-7325 kamij-a@gipac.shinshu-u.ac.jp

利用方法：電話やE-mailなどで予約をするか、教官室へ直接来室して下さい。

How to use: Please visit the office directly, or make an appointment.

秘密は厳守されます。Confidentiality is guaranteed.

- ②人文学部：坂口留学生専門教育担当教官による相談・指導業務。24名
- ③経済学部：秋庭留学生専門教育担当教官による相談・指導業務。80名
- ④理 学 部：留学生専門教育担当教官が配属されていない学部。 10名
- ⑤医 学 部：牧留学生専門教育担当教官による相談・指導業務。 50名

#### ○それ以外の4キャンパス

前述の留学生センター教官による、松本市旭キャンパス以外の3キャンパス訪問相談・指導業務のうち、全体の3分の2に当たる村瀬教官の担当分は、主に保健室とタイアップしての相談・指導業務である。その他の4教官の訪問相談・指導業務は、日本語および日本事情教育指導を通じての、相談・指導業務である。

- ⑥教育学部：留学生専門教育担当教官が配属されていない学部。 18名
- ⑦工 学 部：高野留学生専門教育担当教官による相談・指導業務。82名
- ⑧農 学 部：留学生専門教育担当教官が配属されていない学部。 32名
- ⑨繊維学部：鮑留学生専門教育担当教官による相談・指導業務。 37名

\*人数は何れも平成13年5月1日現在の各学部の留学生数。

\*教育学部（長野市の西長野キャンパス）と多数の留学生が在籍する工学部（長野市の若里キャンパス）では、引き続き、ボランティアの日本語教師（英語教師でもある）北澤先生の尽力に負うところが大きい。氏は、連日、両キャンパスを交互に訪問し、終日、希望者に日本語指導を行い、必要ならば相談にも応じておられる。

#### 4. 1年目の相談・指導業務から明らかとなってきた本大学の問題点

##### ○キャンパス間交流の必要性

巡回訪問相談・指導業務で、各キャンパス（分散学部）の留学生からいつも強く要望される事柄は、各キャンパス間の交流をはかりたいというものであった。確かに、旭キャンパス（松本市）以外の各キャンパスでは、それぞれの一つの学部がその土地での信州大学として存在している。例えば、常田キャンパス（上田市）にある繊維学部へ行こうと駅からタクシーに乗る時、「繊維学部まで」と言うては通じず、「信州大学まで」と言わなければならない。つまり、各キャンパスは、それぞれの所在地で、信州大学の1学部としてでなく、独立した単科大学（名称は何れも信州大学）として存在しているごとくである。そのこと自体は、いかに各学部が、キャンパスの所在地と一体化しているかを証明しているようなもので、昨今求められている、地域に根ざした大学の先駆けをなすような存在ではある。しかしながら、留学生総数が三百数十名とは言え、本部のある旭キャンパス以外では、1キャンパスに1学部存在しているだけであるから、当然、留学生数も限られている。そこで、旭キャンパス以外の学部の留学生は、他キャンパスとの交流を強く希望しているわけである。

### (1)留学生センター主催研修旅行

信州大学全体の留学生の交流をはかる目的で、留学生センター主催の旅行を行うことになり、2000年9月29日(金)には明治村へ、2001年9月28日(金)には日光への旅行を実施した。

#### ①第1回留学生センター主催研修旅行（明治村）

留学生からの要望を強く訴える中で、急きょ実施されることになった。日程、行き先とも、留学生課主導で進められた。日程に関しては、留学生の勉学上問題のない時期である夏休み中、しかも、休暇で帰国していた留学生でも日本へ戻って来る時期である、後期の始まる直前の金曜日に、日帰り旅行でということから決定された。

松本市（人文学部・経済学部・理学部・医学部）、長野市（教育学部キャンパス学生と工学部キャンパス学生とが合流）、南箕輪村（農学部）、上田市（繊維学部）にあるキャンパスからバス1台ずつを発車させ、計4台のバスを連ねて明治村まで日帰り旅行した。参加人数：約100名。

#### ※問題点

- ・留学生総数の何割程度に旅行を周知させられたかどうか不明。（特に旭キャンパス）
- ・実施が急だったので、各学部の他の行事との日程調整がうまくいかなかった。
- ・家族が参加できなかったのが、参加しなかった学生が多かった。（繊維学部）

#### ②第2回留学生センター主催研修旅行（日光）

今年度（平成13年度）は、課長の交代という大幅な留学生課人事の交代があったため、開催自体が危ぶまれる状況にあった。しかしながら、平野課長の意向は、留学生のためになることなら、基本的には前年度に引き続き実施するよう努めるとの方針であったため、昨年度の予算内で、昨年度と同時期に日帰り旅行が実施できることになった。旅行の企画・進行とも相談・指導業務に一任されたが、今回は出来るだけ遠方で有名な土地へということから、最終的には世界遺産に登録されている日光行きが決定された。参加人数：約150名

#### ※問題点

- ・前年度の問題点のうち、実施時期および家族参加の問題は解決されたが留学生全体への周知に関しては、今回も十分とは言えなかった。（特に松本市旭キャンパス）
- ・今回は出来るだけ遠方で有名なところへと欲張ったので、強行軍になることはやむを得なかった。
- \*旅行実施後、留学生に対し、今後の旅行実施に役立てるため、アンケート調査を実施した。結果は、センター旅行については、すこぶる好評で、今後の旅行実施の可否についても、回答者のほとんどが、今後も開催を希望していた。（詳細は次号に掲載予定）

## (2)スポーツ大会への提案

分散学部間の留学生交流に理解のあった、現在は他の教育機関に所属しているある方から、一つの提案があった。それは、信州大学だけにとどまらず、長野県内の他大学などとのスポーツ大会を開催してはどうかというものであった。信州大学のあるキャンパスでは、時々スポーツを通じて留学生が大学職員と交流している例があるが、長野県は何よりも長野オリンピック開催地ということもあり、スポーツ大会の提案は一考に値すると考えられた。しかしながら、多方面へのアプローチの結果、経済が低迷している昨今であるから、近い将来に、他大学を交えての大きなスポーツ大会の実現は難しくそうである。

近年、信大留学生会が開催する運動会が、一年交代で松本市と長野市で開催されている。当面2～3のキャンパス間だけでもスポーツ会を始めてはどうかというアドバイスを踏まえて、留学生会の協力も得ながら来期開催を模索しているところである。

\*将来的には、留学生センター主催の旅行とスポーツ大会を、信州大学の全留学生のための2大イベントとなるよう図りたい。

### ○訪問相談・指導業務の必要性の再認識

前述のように、各キャンパスそれぞれが久しく単科大学のごとく存在していたため、これまで、信州大学全体としてまとまろうとする必要性が全くなかった。内藤センター長の発案で始められた、留学生センター訪問相談・指導業務は、三百数十名というほどよい留学生総数のせいもあり、信州大学という同一意識、統合意識を持って遂行されて成功した珍しいケースではあるまいか。

留学生センター発足以前は、留学生専門教育担当教官が配属されていないのに留学生数が相当数ある学部（農学部）や日本人の留学生専門教育担当教官配属のない学部（繊維学部）では、各キャンパスの保健婦が、留学生の精神保健その他、相談・指導の中心的役割を担っていた。その遠隔地キャンパスの保健婦達は、留学生センターの巡回訪問相談・指導により留学生の事をまかせられてとても楽になったと相談・指導業務を評価してくれている。

#### ※問題点

- ・今一つテレビ電話活用性が低い。

このことは、未だテレビ電話が一般に普及していないせいもある。つまり、テレビ電話が普通になる時代が到来するには今しばらくかかるので、どうしても音声だけの電話で用を済ませがちである。それでも何例かのケースでは精神状態を見る時に有効であったし、今後、業務の拡大などでの相談件数の増加に際しては、何より有効な手段であると考えられる。

## 5. 今期における成果

### ○教官のための『留学生ハンドブック』の発行

多くの留学生指導教官から、かねて要望のあった教官のための『留学生ハンドブック』を、林前留学生課長とタイアップして、留学交流執務ハンドブックを参考に、留学生課の窓口業務のうちもっとも頻発する事項をピックアップして、信州大学用にアレンジして作成した。概ね好評で、追加注文を希望する学部も多かった。

### ○対面を兼ねた、全留学生対象の精神ストレスに関する自記式アンケート調査実施

後述するように、遠隔地キャンパスの保健室業務とは緊密に連携しているが、それでも、保健婦達も把握していない学生も何人かは存在する。特に、工学部のように、大きな学部でしかも男子学生の多いキャンパスでは、たとえ問題を抱えていても相談に訪れない学生も多く存在する。

そこで、そのような学生達にも、留学生センター相談・指導業務を周知させるべく、信州大学の全留学生を対象に、対面を兼ねたストレスに関する自記式アンケート調査を実施した。

各学部の留学生専門教育担当教官や担当事務官、保健室の協力も得て、出来る限り村瀬教官が直接面接する形でアンケート調査を行った。その結果、工学部のどうしても接触できなかった2～3名を

除き、ほぼ全員からの回答が得られた。現在データを解析中であるが、学部別、国籍別、滞在期間別、年齢別、性別、などでのストレス状況の把握が可能となる。概要は次号に掲載する予定である。

※調査から明らかとなったこと

- ・旭キャンパス（松本市）の留学生が留学生センターの存在を知らなかった！

前述したように、留学生センター発足と同時に、遠隔地キャンパスへの巡回訪問相談・指導業務を開始した。そのため、現在では、遠隔地キャンパスの方で、かえって留学生センターが周知されているほどである。

留学生センターを知らなかった学生は、旭キャンパスでも、留学生専門教育担当教官のいない理学部の学生ではあったが、今後は、遠隔地と同様に旭キャンパスでも、留学生のいる研究室を訪問するなどして日頃からそれなりに留学生とのコンタクトが必要であると思われる。

- ・やはり、相談・指導業務担当者は留学生と面識があるべきである。

基本的には、相談・指導業務は、相談者が相談に応じてくれる者を信頼することから始まるものである。留学生は相談・指導業務の担当者の人となりを知った上で相談してみたいと願うものである。そういう点から、今回の面接を兼ねた調査は、大変有意義であった。

- ・今後は、オリエンテーション時に面接を実施する方向へ。

留学生センター発足時にオリエンテーションを受けた学生が、来年度は、本学に来て3年目を迎える。これからは、未だ留学生センターを知らないような学生は大幅に少なくなっていくはずだが、さらに、入学時のオリエンテーションでの面接を徹底させて、今後の相談・指導業務に役立てたい。

## 6. 相談・指導の概況

### ○相談・指導の件数

留学生センターの教官および非常勤講師が、2000年10月～2001年9月の間に扱った相談・指導件数を以下に示す。

(1999年10月～平成2000年9月)

項目	件数	項目	件数
a. 修学関係	122	g. 家庭	9
b. 学内諸手続き	31	h. 健康・医療	107
c. 来日・滞在	10	i. 交流	79
d. 経済問題	17	j. 事故・事件	27
e. 宿舎探し	16	k. その他	64
f. 人間関係	64		

\*注意点：件数の数え方、および、内容の解釈が、教官により若干異なる。また、留学生センターが行う補講での相談・指導件数は、この中にほとんど含まれていない。

### ○相談・指導の内容

相談内容の分類方法はいろいろあろうが、ここでは、一応、以下のように分類した。

- 修学関係（勉学／日本語学習／学位／就職などの進路／その他）
- 学内諸手続き（学費減免／奨学金申請／その他）
- 来日・滞在（入国／在留／その他）
- 経済問題（奨学金／アルバイト／学費／生活費／その他）
- 宿舎探し（学寮／民間寮／アパート／ホームステイ／入居保証／その他）
- 人間関係（研究室留学生／研究室日本人学生／研究室教官／事務／アルバイト先／異性／親族／家主／近隣／その他）

- g. 家 庭（夫婦／家事／育児／教育／その他）
- h. 健康・医療（体の不調／医療機関への受診／国保／留学生医療補助／入退院／その他）
- i. 交 流（チューター／交流／イベント等／ボランティア／雑談など親しい関わり／その他）
- j. 事故・事件（交通事故／遺失／その他）
- k. そ の 他

## 7. 相談・指導業務と他部門との連携

### ○日本語教育部門との連携

当センターでは、5 教官全てが、日本語教育も相談・指導業務も担当することになっている。

前述の留学生センター教官による、松本市旭キャンパス以外の 4 キャンパス訪問相談・指導業務のうち、全体の 3 分の 2 に当たる村瀬教官の担当分は、主に、保健室とタイアップしての相談・指導業務である。その他の 4 教官の訪問相談・指導業務は、日本語および日本事情教育指導を通じての、相談・指導業務である。

他方、当留学生センターの特色として特筆すべきは、非常勤講師陣（2000年10月～2001年3月までは4名、2001年4月～2001年9月まではさらに1名加わり5名）の充実がある。彼女らは、専門の日本語教育の実力は言うまでもないが、留学生に対する教育活動の取組の姿勢、熱意は、まさに敬服に値する。それ故、留学生らも彼女たちの資質を良く承知しており、日本語のみにとどまらず、日常生活全般にわたって広く相談・指導を仰いでいる

\*長野市にある 2 キャンパス、教育学部と工学部では、引き続きボランティアの日本語教師（英語教師でもある）北澤先生にも、常に、当センター相談・指導部門と連携して相談に応じていただいている。

### ○各キャンパスの保健管理センター分室（いわゆる保健室）との連携

分散学部、いわゆる‘たこ足’大学が特色の信州大学であるが、これほど遠隔地にわたるキャンパス間での相談・指導業務は、実際、巡回訪問しての相談指導業務でしかあり得ないことは、前に述べた。

その巡回訪問相談・指導業務を、曲がりなりにも始めることができたのは、ひとえに遠隔地キャンパスの保健婦達のお陰に負うところが大きい。事実、留学生センターの訪問相談・指導業務が機能するまで、保健婦達は、多くの問題をかかえて苦悩する学生達の心のよりどころであった。そういう相談体制ができていたからこそ、そのままバトンタッチする形で、留学生センターが相談・指導業務を引き継ぐことができた。その後も、巡回訪問日以外には、センターとの連絡や連携しての相談指導など、依然として、各キャンパスの保健室と留学生センターの相談・指導業務とは密接な関係がある。ただし、従来の各キャンパスの保健室のあり方を尊重し、画一的な連携は避けるよう心がけている。

例えば、留学生専門教育担当教官が配属されていないのに留学生数が相当数ある学部（農学部）や日本人の留学生専門教育担当教官配属のない学部（繊維学部）では、各キャンパスの保健室が、留学生の精神保健その他、相談・指導の中心的役割を担っていたので、それら保健室との連携を引き続き密にして、相談・指導業務を行っている。一方、長野市にある 2 つのキャンパス（教育学部と工学部）では、ボランティアの北澤先生および担当事務官を中心に（特に留学生数の多い工学部では、留学生専門教育担当教官の協力も得ながら）、保健室とも連携をはかっている。

### ○各学部留学生専門教育担当教官との連携

学部内留学生数の差による多寡はあるものの、留学生に関する情報交換の必要性から、当センター相談・指導業務とは絶えず密接に連絡を取り合っている。各教官とも、留学生センターの発足以前からの着任であるため、これまでに蓄積されたデータが豊富で、情報提供いただく機会が多い。

## ○留学生課との連携

最後になったが、留学生課との連携は、連日欠くことのできない必須のものである。いわゆる留学生への窓口業務であり、そこでの対応がまずいと、そのまま、相談・指導業務への相談件数の多さとして反映される。現在の留学生課での事務官の留学生への対応を見る限り、相談・指導業務としては、望みうる最高のスタッフであると認識している。課長の留学生サイドに立って業務を遂行される姿勢や、他のスタッフの人柄も考慮すると、今後、ますます留学生課の業務が充実していくことが期待できる。

## 8. 来期の目標

- オリエンテーションの充実
- 学内連携部門とのさらに密なる連携（連絡会の充実）
- 民間ボランティアとの支援ネットワーク構築  
（支援組織との連携および新しい協力者の発掘）
- 留学生センター 2大事業  
（研修旅行とスポーツ大会）
- メンタルケアのためのハンドブック発刊

（留学生センター 村瀬さな子）



# 活 動 記 録

## ◇教育・研究シンポジウム

会 場：信州大学旭会館大会議室（3F）

趣 旨：

信州大学留学生センターは、平成11年4月に開設され、留学生の日本語教育、相談、地域交流事業等を担っておおよそ2年近くが経ち、今一度、留学生センターにおける日本語教育の問題点を検証するとともに、地域の日本語教育機関との連携を模索するため、このたび、下記のとおり教育・研究シンポジウム『留学生センターの日本語教育と地域間の連携』を企画しました。

本シンポジウムでは、留学生の日本語教育のあり方や問題点を探り出し、かつ、地域における日本語教育機関との連携のあり方を模索したいと考えています。

プログラム：

### ○第1日目（1月13日〈土〉）

9：00～11：30 パネリスト・指定討論者全体会議

12：20～13：00 受 付

13：00～13：20 開 会

開会の辞 内藤 哲雄（信州大学留学生センター長）

挨拶 森本 尚武（信州大学学長）

13：00～13：30 日程及びシンポジウム進行説明 藤沢文人（信州大学留学生センター教授）

13：30～15：00 基調講演

#### ①『留学生と日本語教育』

講師：水谷 修（名古屋外国語大学教授）

#### ②『地域の日本語教育の目指す方向と大学の果たす役割』

講師：尾崎 明人（名古屋大学留学生センター教授）

15：00～15：15 休 憩

15：15～17：30 パネルディスカッション『学習者に応じた教授法』

コーディネーター：藤原 雅憲（名古屋大学留学生センター教授）

パネリスト：藤原 雅意（名古屋大学留学生センター教授）

伴 紀子（南山大学教授）

岡田 久美（南山大学嘱託講師）

大橋 敦夫（上田女子短期大学助教授）

安藤 節子（(株)スリーエーネットワーク教材開発部長）

### ○第2日目（1月14日〈日〉）

9：30～10：00 受 付

10：00～12：00 ワークショップ『地域の日本語教育との連携』

コーディネーター：上條 厚（信州大学留学生センター助教授）

発表者：足立 祐子（新潟大学留学生センター助教授）

合津 美穂（信州大学留学生センター非常勤講師）

金山久美子（長野外語アカデミー教務主事）

春原 直美（長野県日本語ネットワーク代表）

中平 章（中国帰国者自立研修センター講師）

12：00～ 閉 会（閉会の挨拶）内藤 哲雄（信州大学留学生センター長）

開会の辞……………内藤 哲雄

留学生センター長の内藤でございます。本日は寒さの厳しい中を、ご多用中にもかかわらず、シンポジウム「留学生センターの日本語教育と地域間の連携」に多数の皆様のご参集をいただきまして、誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。信州大学留学生センターは平成11年4月に設置され、外国人留学生の日本語教育、生活や学習に関する相談指導業務、地域との交流事業の推進に取り組んでまいりました。設置から2年近くが過ぎ、ようやくにしてこれまでの事業活動を振り返ることができるようになりました。センターの業務振り返りについて教官一同で話し合った結果、文部省の助成金を得たのを活用しまして、事業活動の中心である日本語教育についての現状を評価点検し、業務の改善と開発を図るためのシンポジウムを開催しようではないか、地域の日本語教育や地域間の連携について検討する企画は、地域の日本語教育機関や他大学のセンターにおいても、有益な情報をもたらすのではないかとということになりました。信州大学における外国人留学生は現在340名に達し、更に増加を続けております。大学院入学前の半年間にわたる日本語予備教育の研修生、学部および大学院の私費留学生や研究留学生を含めての日本語補講の受講生が増加し、出身国も多様となり能力のばらつきも大きくなってきております。信州大学留学生センターでは、専任教官5名、非常勤講師7名という少ない教官数によって、一方では受講生の増加に対応しながら、他方では出身国の文化や事前の日本語能力が異なる、それぞれの学習者の個別性に依拠していくという課題を抱えております。既に初級・中級の日本語学習を終えた留学生たちからは、更に上級のコースを設置してほしいとの要望も少なからず出ておりますが、対応できないのが実情です。平成13年度、来年度ですが、韓国理工系学生の受け入れが後期で始まります。4月からは英語による短期留学の授業コースの学内措置が始まります。これらの新たな事業におきましても日本語教育が不可欠であり、開講コマ数の増加が予想されております。ところで信州大学に特徴的な問題としまして、学部が長野県下各地に分散しており、JR等の鉄道を利用すると、農学部のある南箕輪村までが50キロ、教育学部と工学部のある長野市までが65キロ、繊維学部のある上田市までは80キロもあります。留学生は松本での日本語教育を受けてそれぞれの学部や大学院に進級する者だけでなく、各学部に直接入学する研究生や大学院生もいます。各学部・大学院に直接入学する留学生の中には、日本語の事前教育を全く受けていない者もいます。松本以外でのキャンパスにおける相談業務については、現在センター教官が巡回して受け付けておりますが、巡回できる回数や受け付けて対応できる留学生数には限界があります。また松本以外の各地の学部で開講している日本語補講については、センター専任教官には余力がなく、すべてを非常勤講師で対応しております。文部科学省から支給される予算全般が次第に削減される方向にあり、ますます厳しくなるというご時世ということで、相談業務についてはテレビ電話の利用、また日本語教育については、学内通信LANを用いた遠隔授業システムの利活用の試みが始まっております。今後の課題として、各地域の日本語教育ボランティア団体や国際交流支援団体との連携が模索されています。国立大学は全国に99校ありますが、いずれも目下揺れ動きながらも、独立行政法人化の方向へ向かっております。多くの大学で教育研究のすべてが国際的に評価される水準に達することを目指すとともに、地域に根ざした大学として生き残ることを模索しております。信州大学におきましても教育研究の国際化が重要課題とされております。地域に根ざそうとする大学が国際化していくことは、必然的に地域社会を国際化していくことと緊密に連動することとなります。このため地域の国際交流団体や日本語教育団体との相互協力や連携が不可欠となりつつあります。こうした背景事情のもとで信州大学留学生センターにおきましても、現在に至るまでの日本語教育の問題点を探りながら、地域社会や各種団体との協力や連携を模索しつつ、カリキュラムや教育システムを再構築していくことが求められております。本日13日と明日14日の2日間にわたり、日本語教育の黎明期から精力的にご活躍されてきた多数の先生方、また地域での日本語教育の基盤を確立されてこられた多数の先生方をお迎えして、「留学生センターの日本語教育と地域間の連携」のシンポジウムを開催できますことは、留学生センターの日本語教育と地域の日本語教育および地域間の連携が、今後どのようにあるべきかの方針を見いだす機会となるものであります。信州大学留学生センターにとってだけでなく、お忙しい中を遠路松本までお越しいただいた先生方、県下からご参加いただいた先生方にとりましても、実り多い

ものとなるでありましょう。皆様の貴重なご体験やご研究のご報告、活発な議論により、大きな成果が得られますようにご尽力を賜りたいと存じます。そして2日間の交流を通じて相互のネットワークが構築され、今後の情報交換や連携がますます進展していくことを切に願っております。  
以上で開会のごあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

挨拶.....森本 尚武

信州大学学長の森本でございます。シンポジウムが始まります前に一言ごあいさつを申し上げたいと思います。本日はお寒い中を、またご多忙中のところを、非常にたくさんの方にこのシンポジウムにご参加いただきまして、誠にありがとうございました。またご多忙中のところを基調講演、講師をご快諾いただきました名古屋外国語大学の水谷修先生、ならびに名古屋大学留学生センターの尾崎明人先生を始め、パネルディスカッションおよび明日のワークショップにご協力をいただきます先生方に対しまして、厚く御礼申し上げる次第でございます。現在大学は非常に厳しい状況でございます。このような状況の下で大学審議会からも答申が出ておりますが、そこにもございますようにグローバル化時代に向けて国際的な通用性・共通性の向上と、それから国際競争力の強化というのが、非常に大きな重要な課題でございます。そのためにはグローバル化時代を担う優秀な人材の育成に向けた教育の充実、更には国際的に評価される研究の展開、また学生や教官の国際的な流動性の向上に取り組んでいく必要があるわけでございます。これを受けまして信州大学の理念・目標の中にも、地域社会との緊密な連携、それから国際交流を積極的に推進するということを掲げております。すなわち教育研究面での産学間、産・官・学の連携、更にはアジア諸国を始め世界各国からの留学生を積極的に受け入れ、かつ学生の外国留学と教官の諸外国への派遣を推進していこうと思っております。地域に根ざし世界に開くということを目指しまして、不断の努力をしているところでございまして、地域の方々と共に信州大学の国際化を更に進展させていくということが必要でございます。そうなりますと、信州大学留学生センターというものは非常に大きな役割を果たすことになるわけでございます。地域を始め信州大学またわが国それから世界の中心的な施設という意味で、毎日、内藤留学生センター長始め専任教官の方々が努力をしているところでございます。どうか地域の方々にもぜひご支援を賜りたいと思っているわけでございます。この度のシンポジウムにおける活発なご議論、それから更には情報交換というものを通じまして、信州大学の国際化を更に進めていくことを願っておるわけでございます。われわれ執行部としましても強気にサポートをしていきたいと思っているわけでございます。今後とも信州大学の留学生センターへの一層のご協力をお願いいたしまして、簡単でございますが一言ごあいさつを申し上げる次第でございます。本日も明日よろしく願いしたいと思っております。どうも失礼いたしました。

#### ○平成12年度後期～13年度前期信州大学留学生センター活動記録

- 平成12年10月2日 平成12年度後期共通教育授業開始
- 10月10日 平成12年度後期日本語研修コース（第三期）オリエンテーション
- 10月13日 後期日本語研修コース開講式
- 10月16日 後期日本語研修コース授業開始
- 10月23日 後期日本語補講開始
- 10月31日 松本街歩き
- 11月2日 平成12年度長野県留学生交流推進協議会
- 11月17日 平成12年度第5回教会会議
- 11月17日 平成12年度第2回留学生担当教官連絡会
- 11月17日 松本東ロータリークラブ主催留学生スピーチコンテスト
- 12月18日 留学生に本を贈る会図書贈呈式
- 12月21日 平成12年度第5回留学生センター運営委員会
- 12月27日 平成12年度第4回国際交流委員会留学生専門委員会

平成13年1月13日, 14日 留学生センター教育研究シンポジウム  
2月9日 第6回教官会議  
2月27日 後期日本語研修コース発表会  
3月1日 第7回教官会議  
3月7日 第6回留学生センター運営委員会  
3月7日 第3回留学生担当教官連絡会  
3月9日 第三期日本語研修コース修了式  
3月30日 平成12年度日本語補講（松本地区）閉講式  
4月5日 平成13年度留学生ガイダンス  
4月9日 平成13年度前期日本語研修コースオリエンテーション  
4月11日 平成13年度前期共通教育授業開始  
4月11日 日本語研修コース生への日本事情オリエンテーション  
4月16日 平成13年度第1回留学生センター教官会議  
5月9日 平成13年度日本語補講開講式  
5月10日 日本語補講担当教官会議  
5月14日 前期日本語補講授業開始  
5月29日 第2回教官会議  
6月22日 第3回教官会議  
6月25日 平成13年度第1回留学生センター運営委員会  
6月25日 平成13年度第1回留学生担当教官連絡会  
7月23日 第4回教官会議  
9月18日 前期日本語研修コース発表会  
9月18日 第5回教官会議 9月18日  
9月20日 第2回留学生センター運営委員会  
9月26日 第四期日本語研修コース修了式  
9月28日 全学留学生研修旅行（日光）

# 交 流 事 業

留学生センター教官は共通教育「日本語・日本事情」の授業や隔地の学部訪問を通して、また、各学部の留学生担当教官を介して学部留学生とつながっていますが、その他にも、全学留学生研修旅行、留学生センター談話室での日常会話等でより深く日本語研修コース留学生も含めた留学生達と会話を行っています。さらに、留学生センターでは、松本キャンパス近辺の小中学校、市町村さらに留学生支援のボランティア等が主催する留学生との交流事業の仲介役を行っています。

## ○留学生との交流活動

団 体 名	交 流 活 動 の 名 称
梓川村教育委員会	第12回留学生と青少年のつどい
いけばなインターナショナル信濃支部	いけばなの会
信州大学教育学部附属松本小学校	留学生との交流学习
長野県国際交流推進協会	留学生信州ふるさとフェスティバル
長野県日中友好協会青年委員会・女性委員会	第38回日中友好キャンプ 友好王国in乗鞍高原
松川村社会福祉協議会	第7回国際交流
松本市本郷小学校	留学生との交流学习
松本市松本盲学校中等部	〃
松本留学生応援ファミリーの会	第14回留学生歓迎ふれあいパーティー

## ○長野県留学生交流推進協議会

長野県留学生交流推進協議会は、長野県内における留学生の受入れの促進と交流活動推進のために設けられています。信州大学学長が会長を務め、県内の大学、高等専門学校及び専門課程を置く専修学校の長、県内の公的機関、経済団体、国際交流関係団体の長又は代表者によって組織されていて、信州大学学生部留学生課が庶務を行っています。

## ○第11回留学生日本語スピーチコンテスト

松本東ロータリークラブが事業活動の一つとして留学生の日本語スピーチコンテストを毎年行っています。平成12年11月17日、ホテルブエナビスタにおいて4ヶ国10名の留学生が「もし私が市長なら」、「日本に来て一番感動したこと」、「日本に来て一番困ったこと」の、三つのテーマでスピーチを行いました。一位は経済学部の陳妍均さん、二位は経済学部の徐娟さん、三位は医学研究科の関新さんでした。

### 日本に来て一番感激したこと.....陳 妍均

靴下に穴があいたら、みなさんはどうしますか。それを捨ててしまいますか、または糸を使って穴を繕いますか。それともその靴下を雑巾として、家をきれいにしますか。日本に来る前のことならば、私の答えは前者だけど、今私の答えは後者の方になりました。

奈良県でホームステイをしていたときのことでした。ある日、私が日本語学校から家に帰ったら、自分が朝に洗濯して干したままになっていた服などはおばあちゃんがもう外から取り入れて、畳んでくれていました。それで、私はすぐ、服の一番上に置いた靴下の変化に気が付きました。「えー、アマン(ちなみにアマンは台湾語でおばあちゃんを意味します。私はいつもおばあちゃんのことをアマンと呼びます。)アマン、この靴下...。」「そうや、靴下に穴が開いてたやんか、さっき直しといたんや。」そ

の時、私はびっくりしたというより、おばあちゃんの暖かい思いやりで心がいっぱいになりました。おばあちゃんは私を自分の孫として、すごく親切にしてくれて、私が捨てようとした靴下にまで気をつけてくれました。その後、私のその靴下は何回か穴が開いてしまいましたが、おばあちゃんはいつも糸で直してくれました。とうとうその靴下は直せなくなりました。だけど、おばあちゃんにはまだ再利用の方法がありました。それはハサミで靴下を切り、使い捨ての雑巾にすることでした。私はおばあちゃんのことを大切に作る心に非常に感心しました。

さて、日本語学校が冬休みに入り、私が初めてのアルバイトへ行く日のことでした。朝ご飯を食べ終わって私が出かけようとした時に、おばあちゃんはどこからか一つの弁当箱を取り出して、私に「昼の弁当や。ちゃんと食べやー。」といいながら私に渡しました。家の事情で、小さい頃から弁当を学校へ持っていったことがない私は幸せな感じでいっぱいでした。弁当箱は軽いけど、私には宝物のように重く感じました。冬の朝は寒いけど、私はその弁当のおかげで、体全身温かくなってきました。そして、その日の昼休みを首を長くして待っていました。それで昼休みに涙を流しながらおばあちゃんの心をこめた弁当をゆっくりと、ゆっくりと味わいました。そのおいしさは今でも忘れられません。

おじいちゃんとおばあちゃんの家でホームステイをしていたその一年半は、本当に大変お世話になりました。その一年半に私はずっと小さな、そして大きな感動をしつづけてきました。おじいちゃんとおばあちゃんが教えてくれた人生のことや、生活のコツを私は宝物として大切にしていこうと思っています。「アコン、アマン、本当にありがとうございました。」

#### 一番困った時の思いで……………関 新

二年前私は私費留学生として家族を離れて、独りで日本にまいりました。いろいろなことを経験しましたが、なかなか忘れられないのは、はじめて日本に来た時のことです。

最初の留学先は、青森県の弘前大学です。弘前に着いた時は平成十一年の冬で、一番寒い時です。松本も寒いですが、弘前に比べると、凄く有難いと思います。あんなに寒い雪は、北京からの私にとってははじめてのことでした。一週間経ったら、あの真白の世界はもうロマンチックなイメージではなくなって、大変困った問題になりました。自転車はもちろん全然乗れません。最初は特別な長靴がなくて、何十センチという深さの雪の中を歩いて、すぐズボンが全部濡れちゃいました。でも一番困ったことは滑ることです。弘前は日本海側にあるので、雪が降るとすぐ溶けて、また凍ります。このように溶けたり、凍ったりすると、道は鏡のようにつるつる滑るのです。地元の人たちは冬用の靴を履いて、歩くのにも慣れていましたが、私は全然だめでした。何回も転びました。転んだらつらくて泣きながら歩くこともよくありました。

つぎ、経済的な困難も襲ってきました。弘前に着いて三ヶ月たつと、中国から持って来たお金は、入学料、試験料、部屋代を払ったため、もうほとんど残っていませんでした。最初住んでいる所で自炊できないため、毎日外食しかできません。間もなく外食は高く耐えられなくなり、インスタントラーメンが私の毎日の主食となりました。それを三ヶ月食べつづけますと、飽きてしまいました。今でもインスタントラーメンを見ると、胃腸の気持ちが悪くなって吐きそうです。

生きるためにアルバイトをしなければならないのです。ちょうど日本が不景気な時でした。東北の弘前はもっと厳しかったのです。日本人も就職先が見つかりませんでした。私はいろいろ応募しましたが、外国人だと聞いたら、全部断られました。最後にようやく留学先の教授の紹介によって、ある料理屋さんでアルバイトできるようになりました。その前まで自分は日本語がうまいと自慢していましたが、実際アルバイトをしたら、実はまだまだ足りないということが分かりました。青森県には方言があります。その津軽弁は私にとって、まるで別の国の言葉みたいで、ほとんど通じませんでした。その上お医者さんであった私が肉体労働をするのもなかなか慣れませんでした。誰もできる簡単な仕事であっても私にとって患者さんを診たり、手術をしたりするよりも難かったです。間もなくその店のママさんの顔はだんだん冷たくなってきて、言葉もきつくなりました。疲れだけではなく、自尊心もすごくダメージを受けました。その上、ひどいホームシックに落ち込んでしまいました。夫に会いたい、娘に会いたい、年

取った両親に会いたい。止めよう、中国に帰ろうと言う気持ちが日々強くなりました。このように、毎日涙を流しながらの生活を半年続けたある日、突然次のことに思いあたりました。まだなんにも学んでいないままかえることは絶対にできない。自分はもう糸の切れた凧だ、帰り道がないと自覚したのです。一旦覚悟したら、積極的な努力が始まりました。自分が真剣にやれば、助けてくれる人も増えました。そのあとたくさんの友達もできました。一年のち私は弘前を去るときには気持ちもずいぶん変わりました。あの一年間のつらいこと、楽しいこと、もう全部貴重な思い出になりました。前にとっても苦手だった弘前の雪も懐かしくなりました。

この二年間の留学生生活を振り返れば、たくさんの苦労と痛みを経験しましたがけれども、絶対後悔しません。アルバイトを通じて、いろいろな日本人とふれ合ううちに、日本の社会、文化と日本人について更に全面的に理解できるようになりました。私だけじゃなくて、幸せそうな日本人の背後にもたくさんの苦労があります。私は今相変わらず私費留学生で、生活の問題はやはり一番の悩みです。その上私の主人は今アメリカのメリランド大学で留学していますから、二人とも収入がなく、別居で、確かに寂しくて辛いです。でも自分の夢のためにお互いに頑張りたいです。今までの留学生活とこれからの生活を両方とも大事にしたい。どんなことがあっても、もう逃げません。絶対負けません。

私費留学生の皆さんはみんな私のような経験があると思います。ここで私が言いたいのは、自分が選んだ道を歩きつづけてくださいということです。信念を持って、あきらめずに精一杯頑張れば、きっと報われると思います。

#### ○信州の留学生に本を贈る会

藤本幸邦住職が会長を務めておられる円福友の会が、平成12年度から新潟県を加え、毎年信州・新潟で学ぶ留学生から作文を募集して、それを冊子『留学生の思い』にして発行しています。平成12年度は62編の作文が、その1つずつに藤本住職が添えられた懇切丁寧な評とともに掲載されています。また、円福友の会は、信州・新潟の留学生に本を贈る会を主催して、毎年、信州・新潟の留学生に一万円相当の希望申し込み図書を贈っています。平成12年度は309名の留学生に贈られました。

#### ○『アジア賞』論文コンクール

松本ワイズメンズクラブが、私費外国人留学生への学費援助のために『アジア賞』と銘打った論文コンクールを行っています。平成12年度は16名の応募があり、経済学部 戒江紅さん、施鋒さんが、それぞれ金賞、銀賞、医学研究科の関新さんが、銅賞の各賞を受賞されました。

# 資 料

## 留学生数

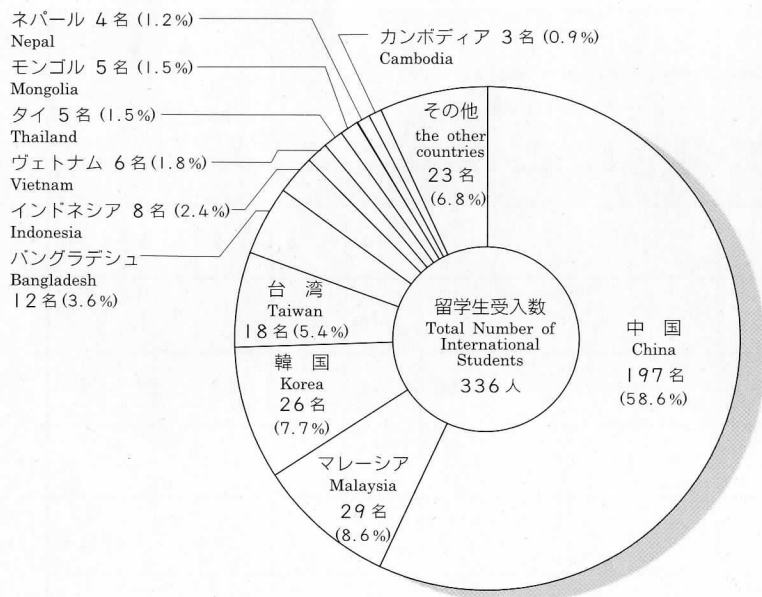
平成13. 5. 1現在  
As of May 1, 2001

区 分 Classification		国 費 Japanese Government Scholarship			政 府 Government Scholarship in a Student's Country			私 費 Private Expenses			合 計 Total			
		男 Male	女 Female	計 Total	男 Male	女 Female	計 Total	男 Male	女 Female	計 Total	男 Male	女 Female	計 Total	
学部学生 Undergraduate Students	人文学部 Faculty of Arts							2	4	6	2	4	6	
	教育学部 Faculty of Education								1	1		1	1	
	経済学部 Faculty of Economics		1	1				40	36	76	40	37	77	
	理学部 Faculty of Science												0	
	医学部 School of Medicine							1	1	2	1	1	2	
	工学部 Faculty of Engineering		2	2	13	3	16	30	2	32	43	7	50	
	農学部 Faculty of Agriculture							1		1	1		1	
	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology							3		3	3		3	
	計 Sub Total		3	3	13	3	16	77	44	121	90	50	140	
大学院学生 Graduate Students	人文科学研究科 Division of Arts							2	4	6	2	4	6	
	教育学研究科 Division of Education	1		1				2	5	7	3	5	8	
	経済・社会政策科学研究科 Division of Industrial and Social Studies	1		1				1	2	3	2	2	4	
	医学研究科 Division of Medicine	5	2	7				15	20	35	20	22	42	
	工学系研究科 Division of Science and Technology	博士前期課程 Master's Program	1	4	5				13	7	20	14	11	25
		博士後期課程 Doctor's Program	12	5	17				14	5	19	26	10	36
	農学研究科 Division of Agriculture	2	1	3				8	4	12	10	5	15	
	岐阜大連合農学研究科 (博士課程) The Joint Graduate School of Agricultural Sciences, with Gifu Univ.	4	1	5				4	1	5	8	2	10	
計 Sub Total	26	13	39				59	48	107	85	61	146		
研 究 生 Research Students	8	3	11				12	16	28	20	19	39		
聴講生, 科目等履修生 Auditors, Credited Auditors							4	7	11	4	7	11		
合 計 Total	34	19	53	13	3	16	152	115	267	199	137	336		



## ■国別外国人留学生受入数

Number of International Students by Nationality

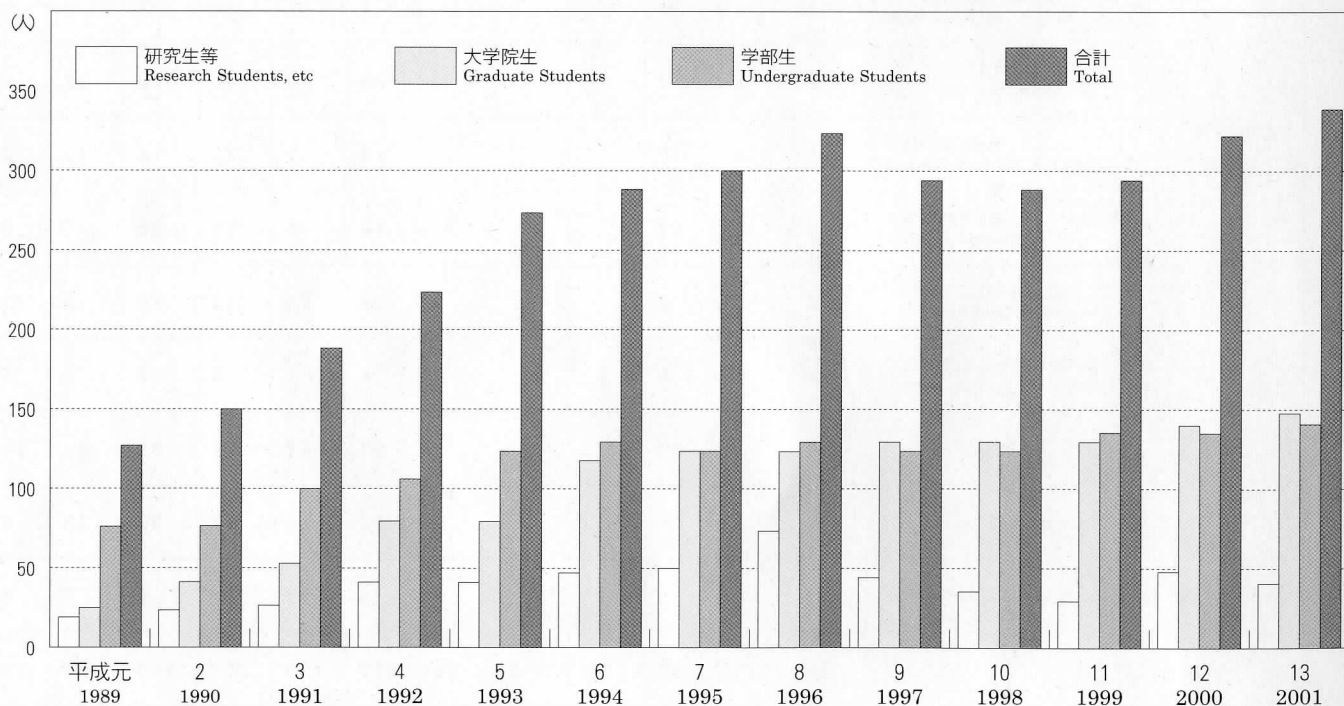


### その他の国 23名 the other countries

エジプト 2名 (Egypt)	香港 1名 (Hong Kong)	スペイン 1名 (Spain)
ドイツ 2名 (Germany)	ハンガリー 1名 (Hungary)	アメリカ 1名 (United States of America)
インド 2名 (India)	ミャンマー 1名 (Myanmar)	フランス 1名 (France)
イラン 2名 (Iran)	ケニア 1名 (Kenya)	メキシコ 1名 (Mexico)
ベラルーシ 1名 (Belarus)	ルーマニア 1名 (Romania)	ブラジル 1名 (Brazil)
アルゼンチン 1名 (Argentina)	ラオス 1名 (Lao)	カザフスタン 1名 (Kazakhstan)
エクアドル 1名 (Ecuador)		

## ■信州大学における外国人留学生の受入れ推移

Yearly total of International Students



## ■外国人留学生年度別受入れ数の推移

各年度5月1日現在

	人文学部	教育学部	経済学部	理学部	医学部	工学部	農学部	繊維学部	教養部 留学生センター	計
36						2		1		3
37						3		1		4
38						2		1		3
39						2		1		3
40										0
41		1								1
42		1								1
43		1					1			2
44	2									2
45	2	1								3
46		1								1
47		1								1
48		2								2
49					1	1				2
50		1						2		3
51	1	1				1	1	2		6
52		1				1				2
53		2								2
54		1			2					3
55			1	1	5	2		4		13
56		1	1	1	5	3		6		17
57	1	2	1	2	7	1	1	11		26
58			3	2	9	4	1	16		35
59		1	2		8	6	3	19		39
60	2	1	4	1	9	9	5	15		46
61	4		10	3	14	15	4	12		62
62	9	3	23	2	12	17	6	13		85
63	13	4	36	2	15	15	9	10		104
1	18	3	47	2	16	15	10	12		123
2	18	6	53	4	20	26	9	11		147
3	23	11	55	4	20	41	15	14		183
4	25	16	56	8	31	48	22	15	1	222
5	26	24	64	11	41	38	20	42	3	269
6	31	24	68	12	45	41	18	39	2	280
7	39	21	69	15	46	53	30	26		299
8	41	22	73	11	44	58	31	45		325
9	44	16	73	7	36	54	33	35		298
10	37	13	77	9	33	52	33	36		290
11	30	12	86	9	31	58	30	37		293
12	19	15	84	13	44	73	28	39	7	322
13	24	18	80	10	50	82	32	37	3	336



## 交流協定締結大学一覧

### 大学間協定 Partnership Agreement Between Universities

平成13. 5. 1現在  
As of May 1. 2001

国名 Countries	大学名 Name of Foreign University or Institute	締結年月日 Date of Agreement
中華人民共和国 China	西南農業大学 Southwest Agricultural University Chongqing, Sishuan	昭和63年3月23日 March 23. 1988
大韓民国 Korea	江原大学校 Kangwon National University	平成7年10月1日 October 1. 1995
アメリカ合衆国 United States of America	ユタ大学 The University of Utah	平成8年3月27日 March 27. 1996
中華人民共和国 China	同済大学 Tongji University	平成8年5月1日 May 1. 1996
インド India	インド工科大学マドラス校 Indian Institute of Technology, Madras	平成8年8月28日 August 28. 1996
中華人民共和国 China	河北農業大学 Agricultural University of Hebei	平成8年9月1日 September 1. 1996
中華人民共和国 China	河北医科大学 The Hebei Medical University	平成8年9月20日 September 20. 1996
タイ国 Thailand	チェンマイ大学 Chiang Mai University	平成8年12月24日 December 24. 1996
中華人民共和国 China	蘭州大学 Lanzhou University	平成9年9月8日 September 8. 1997
中華人民共和国 China	蘇州大学 Suzhou University	平成9年11月4日 November 4. 1997
中華人民共和国 China	太原理工大学 Tai Yuan University of Technology	平成10年4月15日 April 15. 1998
英国 United Kingdom	エクセター大学 The University of Exeter	平成10年6月30日 June 30. 1998
フランス France	ラ・ロッシェル大学 The University of Ra Rochelle	平成10年9月2日 September 2. 1998
オーストラリア Australia	カーティン工科大学 Curtin University of Technology	平成11年4月20日 April 20. 1999
オーストラリア Australia	オーストラリア南極研究所 Australian Antarctic Division	平成11年8月6日 August 6. 1999
ポーランド共和国 Poland	ピアリストーク大学 University of Bialystok	平成11年9月1日 September 1. 1999
英国 United Kingdom	マンチェスター理工科大学 University of Manchester Institute of Science & Technology	平成11年9月10日 September 10. 1999
中華人民共和国 China	東華大学 Dong Hua University	平成11年10月4日 October 4. 1999
インドネシア共和国 Indonesia	プリタハラパン大学 Pelita Harapan University	平成12年1月31日 January 31. 2000
タイ国 Thailand	カセサート大学 Kasetsart University	平成12年3月16日 March 16. 2000
中華人民共和国 China	河南農業大学 Henan Agricultural University	平成12年3月23日 March 23. 2000
大韓民国 Korea	尚志大学校 Sangji University	平成12年11月1日 November 1. 2000
ポーランド共和国 Poland	シレジア工科大学 The Silesian Technical University	平成12年12月1日 December 1. 2000
中華人民共和国 China	中国地質大学 China University of Geosciences	平成13年2月15日 February 15. 2001

### 学部間協定 Partnership Agreement Between Faculties

平成13. 5. 1現在  
As of May 1. 2001

国名 Countries	大学名 Name of Foreign University or Institute	対応学部 Faculty of our University	締結年月日 Date of Agreement
タイ国 Thailand	チュラロンコン大学医学部 Faculty of Medicine, Chulalongkorn University	医学部 School of Medicine	平成2年9月17日 September 17. 1990
アメリカ合衆国 United States of America	ノースカロライナ州立大学繊維学部 College of Textile, North Carolina State University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成8年6月4日 June 4. 1996
中華人民共和国 China	北京大学国際関係学院 School of International Studies in Peking University	経済学部 Faculty of Economics	平成9年12月24日 December 24. 1997
中華人民共和国 China	北京大学経済学院 School of Economics of Peking University	経済学部 Faculty of Economics	平成10年2月9日 February 9. 1998
ドイツ Germany	マンハイム大学 Mannheim University	人文学部 Faculty of Arts	平成11年3月11日 March 11. 1999
中華人民共和国 China	香港理工大学応用科学及紡織学部 Faculty of Applied Science and Textiles The Hong Kong Polytechnic University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成11年10月4日 October 4. 1999
大韓民国 Korea	嶺南大学工学部 College of Engineering Yeungnam University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成12年9月7日 September 7. 2000
大韓民国 Korea	漢陽大学工学部 College of Engineering Hanyang University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成12年9月8日 September 8. 2000
タイ国 Thailand	シナコリンウィロード大学理学部 Faculty of Science, Srinakharinwirot University	理学部 Faculty of Science	平成12年11月20日 November 20. 2000

■信州大学留学生センター日本語研修コース(大学院入学前予備教育)修了生名簿

	氏名	性別	国名	生年月日	専門教育受入れ大学	指導教官
第3期生 (12年度後期)	TITIK HASTUTI (ティティク ハストゥティ)	女	インドネシア	1966. 6.12	教育学研究科 (13. 4~)	徳井 厚子
	CANGKAMANO BOONPARD (カンカマノ ブンパルド)	男	タイ	1966. 2.23	教育学研究科 (13. 4~)	藤田 英樹
	SARRAUDE ANDRES (サラウド アンドレス)	男	アルゼンチン	1972.12.18	教育学研究科 (13. 4~)	阿久津昌三
	JAKDETHAI ORAWAN (ジャックデッチャイ オラワン)	女	タイ	1978. 6. 8	工学系研究科 (13. 4~)	中島 剛
	LALAN ERLANI (ララン エルラニ)	男	インドネシア	1970. 4. 4	教育学研究科 (13. 4~)	伊藤 武広
	MARCEL HAGEN (マルセル ハーゲン)	男	ドイツ	1977.10.28	人文科学研究科 (12.10~)	井出 万秀
	王 慎 闊 (オウ シンカツ)	男	中国	1978.12.28	工学系研究科(理学) (12. 4~)	藤山 静雄
	張 秀 果 (チョウ シュウカ)	男	中国	1965. 4.25	医学研究科 (12. 8~)	小田切徹太郎
	趙 曉 燕 (チョウ ギョウエン)	女	中国	1967.11.18	医学研究科 (12. 4~)	管根 一男
	全 宇 紅 (トン ウコウ)	女	中国	1970.10. 4	医学研究科 (12.10~)	青山 俊文

	氏名	性別	国名	生年月日	専門教育受入れ大学	指導教官
第4期生 (13年度前期)	HAN KRISHNA (ハン クリシュナ)	男	カンボディア	1979. 3.25	農学研究科 (13.10~)	魚住 侑司
	BHANKARI, RAMESH, KUMAR (バンダリ ラメシュ クマル)	男	ネパール	1973.12.25	工学系研究科 (13.10~)	伊東謙太郎
	FOREST, FREDERIC (フォレスト テレデリック)	男	フランス	1978. 2. 3	農学研究科 (13.10~)	茅原 紘
	HERBRAND KATJA (ヘアブランド カーティア)	女	ドイツ	1977.10.28	人文科学研究科 (13. 4~)	井出 万秀
	張 銳 (チョウ エイ)	女	中国	1973. 5.26	医学研究科 (13. 2~)	鈴木 龍雄

# 信州大学留学生センター教官業績一覧

氏名 ①著書 ②論文・研究ノート ③翻訳 ④書評・随筆 ⑤学会・研究会での報告 ⑥その他

## 村瀬さな子

①1996 1 Yamauchi T. et al. Research for method of preventive maintenance against environmental pollution and its health risk for resident in industrial areas, northeast of China. *Asia Watch in Nature and Societies: Final Reports of Reserch Projects* 198-207; 1977 2 西久保光弘 他: 甲状腺ホルモンの三環系抗鬱剤イミプラミン代謝に及ぼす影響. *精神薬療基金年報* 9:1-6; 1993 3 北畠正義, 村瀬さな子: 硫酸化物大気汚染の改善の効果に関する疫学的研究. 平成4年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書; 1996 4『実践看護婦国家試験問題、川原田嘉文(編)』(メディカ出版、東京、担当部分「公衆衛生/社会福祉、pp15-18、26-27、29-30、39」); 1996 5 村瀬さな子 他: 日本・中国・韓国の三国における精神ストレスの異同と生活・文化との関連について. *健康文化(勸明治生命厚生事業団第2回健康文化研究助成論文集)* 2:42-53; 1996 6 山内 徹 他: 中国東北部工業地帯における環境保護対策と住民健康被害の予防に関する研究 PASSIVE SAMPLE法による大気汚染測定の有効性を中心に. *アジアの地域自然環境と研究開発に関する調査研究論文集* 179-185; 1996 7 山内 徹 他: 中国東北部工業地帯における環境保護対策と住民健康被害の予防に関する研究. *アジアの地域自然環境と研究開発に関する調査研究論文集* 3:97-107; 1997 8 村瀬さな子 他: いじめと自殺企図の関連性に関する学校精神医学的研究. 平成9年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書; 1997 9『先生、電子メール使えますか? EU DORA PRO, Eudora-J入門』(pp1-90、チーム医療、東京、共)

②1991 1 Kitabatake M, Kasama K, Murase S, Yoshida K: Metabolic fate of <sup>15</sup>N-labeled nitrite and nitrate in mice digestive tract. *Mie Med J* 41:141-146; 1992 2 Kitabatake M, Murase S. et al. Effects of mixed exposure to ammonium sulfate aerosol and nitrogen dioxide on guinea pigs with experimental asthma. *Report of the Environmental Science, Mie University* 16:13-20; 1992 3 Kitabatake M. et al. Procedure for evaluating changes in respiratory symptoms of experimentally asthma-induced guinea pigs by a personal computer. *J Toxicol Environ Health* 37:265-275; 1995 4 Kitabatake M. et al. Effects of exposure to NO<sub>2</sub> or SO<sub>2</sub> on bronchopulmonary reaction induced by candida albicans in guinea pigs. *J Toxicol Environ Health* 45:75-82; 1995 5 Murase S. et al. Seasonal Mood variation among Japanese residents of Stockholm. *Acta Psychiatrica Scand* 92:51-55; 1997 6 Murase S. et al. The prevalence of depression symptoms during six years of medical school in Japan. *Mie Med J* 47:31-35; 1997 7 Murase S et al. The Sharing of patient records through computer networks. *Mie Med J* 47:37-40; 1997 8 Chi D, Murase S. et al. World-Wide-Web supporting to Chinese students in Japan -Electronic Chinese-Japanese-English dictionaries of Japanese lifestyles and common words. *Jpn J Com Sci* 14:13-17; 1998 9 Nishimura M. et al. Investigations on the Incidence Rate of Chronic Obstructive Respiratory Diseases from the Receipts of the National Health Insurance System. *Environmental Sciences*, 6, 2:77-91; 10 Murase S. et al. Lifestyle/cultural attitudes of salaried employees from large metropolitan-based companies by gender and age. *Studies in Comparative Culture*. in press; 1979 11 林(村瀬)さな子: Anorexia Nervosa の遅発例について. *精神神経学雑誌*. 81:1; 1981 12 林(村瀬)さな子, 鳩谷 龍: Trichotillomania の2例. *精神神経学雑誌*. 83:9; 1984 13野村純一 他: 精神疾患における視床下部下垂体-甲状腺系および性腺系機能. *精神医学*: 26:1; 1988 14村瀬さな子: 神経性食欲不振症における視床下部-下垂体-性腺系の内分泌学的検索. *三重医学* 32:315-324; 1989 15村瀬 澄夫 他: 柴朴湯による神経症治療. *新薬と臨床* 38:1014-1023; 1990 16大谷 正人 他: 脳下垂体前葉ホルモン(ネオプロセリン)による神経性食欲不振症の治療-内分泌学的検索に基づいて. *精神医学* 32:63-69; 1991 17大谷 正人、村瀬さな子 他: 摂食障害における頭部CT、脳波、内分泌異常の相関関係. *精神医学* 33:505-509; 1992 18北畠正義、村

瀬さな子 他：大気汚染と肺癌. 三重大学環境科学研究紀要 16：21-27； 1992 19北畠正義、村瀬さな子 他：大気汚染と気管支喘息. 三重大学環境科学研究紀要 16：29-35； 1992 20北畠正義、村瀬さな子 他：四日市における公害認定患者による慢性閉塞性肺疾患の長期予後について. 三重大学環境科学研究紀要 16：37-46； 1993 21村瀬さな子 他：北欧在留邦人の季節性感情障害 (SAD). 日本衛生学雑誌 48：399； 1995 22北畠正義、村瀬さな子：四日市地域の公害認定患者における慢性閉塞性肺疾患の再発と寛解. 日本公衆衛生学雑誌 42：3； 1995 23村瀬さな子：中国人留学生と、日本人学生、労働者間のBDIの比較. 産業衛生学雑誌 37：supplement March； 1995 24北畠正義 他：四日市地域における大気汚染の推移ならびに中高年の気管支喘息の受診率および死亡率の推移について. 日本衛生学雑誌 50：737-747； 1995 25北畠正義 他：四日市地域の公害認定患者における慢性閉塞性肺疾患の再発と寛解. 日本公衆衛生学雑誌 42：171-186； 1995 26北畠正義 他：四日市地域における大気汚染の推移ならびに中高年者の気管支喘息の受診率および死亡率の推移について. 日本衛生学雑誌 50：274； 1995 27村瀬さな子 他：BDIに関する医学生集団の応答. 日本衛生学雑誌 50：504； 1996 28村瀬さな子 他：中国人留学生および就学生の精神保健 -Beck Depression Inventory による比較調査. 公衆衛生学誌、43：398-402； 1997 29村瀬さな子 他：日韓における精神ストレスの異同と生活文化との関連について. 日本衛生学雑誌 52：175； 1997 30村瀬澄夫、村瀬さな子：インターネットによる学術発表の著作権と優先権 -インターネット学会開催経験からの考察. コンピュータサイエンス、14：33-39； 1998 31中井桂司 他：イントラネットを利用した教育、研究、診療支援 -内科学教室における情報共有の試み. 三重医学 41：121-125； 1998 32中井桂司 他：World Wide Web (WWW)を利用した細胞膜抗原 (CD) データベースの作成と利用. 三重医学 41：111-115； 1999 33北畠正義 他：二酸化窒素暴露による実験喘息、特に遅発型反応への影響. 四日市大学環境情報論集 2：221-236； 2000 34 村瀬さな子 他：日・韓における精神ストレスの異同 生活文化との関連から. 信州大学 留学生センター紀要 1：95△101； 2001 35北畠正義 他：中国・本溪市における大気汚染と呼吸器疾患の関係 (第1報) -学童の呼吸器系疾患有病率とIgE抗体価について-. 四日市大学環境情報論集 4：123△140； 2001 36村瀬さな子 他：日・中における精神ストレスの異同 -生活・文化との関連から-. 留学生センター紀要 2：113△119

⑤国際学会；1 Effects of Exposure to NO<sub>2</sub> or SO<sub>2</sub> on Broncho-Pulmonary Reaction Induced by Candida Albicans in Guinea Pigs (The 1994 MIE International Forum & Symposium on Global Environment and Friendly Energy Tecnology)；2 Comparative study on mental stress of workers in Japan, China and Corea (The 14 International Scientific Meeting of the International Epidemiological Association)；国内学会； 1979 1「Anorexia Nervosa の遅発例について」(第98回東海精神神経学会)； 1981 2「Trichotillomania の2例」(第106回東海精神神経学会)； 1983 3「神経性食欲不振症に対する脳下垂体前葉ホルモン(ネオプロセリン)による治療経験について」(第112回東海精神神経学会精神医学)； 1992 4「北極圏における在留邦人の精神保健」(第38回東海公衆衛生学会)； 1992 5「四日市地域における公害認定患者による気管支喘息の再発について」(第51回日本公衆衛生学会)； 1993 6「北欧在留邦人の季節性感情障害 (SAD)」(第63回日本衛生学会)； 1993 7「四日市地域における大気汚染の推移と慢性閉塞性呼吸器系疾患による死亡状況」(第52回日本公衆衛生学会)； 1993 8「四日市地域における気管支喘息の再発の状況について」(第52回日本公衆衛生学会)； 1995 9「BDIに対する医学生集団の応答」(第65回日本衛生学会)； 1995 10「中国人留学生と日本人学生・労働者間のBDIの比較」(第68回日本産業衛生学会)； 1996 11「中国東北部工業地帯の大気汚染の現状 第1報 Passive sampler による長期間測定」(第55回日本公衆衛生学会)； 1996 12「中国東北部工業地帯の大気汚染の現状 第2報 ATSDL D質問表と呼吸機能検査による学童の健康影響調査」(第55回日本公衆衛生学会)；13「日・韓における精神ストレスの異同と生活・文化との関連について」(第67回日本)

## 上條 厚

①1994『使い方の分かる類語例解辞典』、小学館、共著、遠藤織枝他4名編

②1989「ベトナム語話者(難民)の誤用分析」『日本語教育』68 pp.248-258、 1996「常用漢字に対応する

漢語"新字形"一漢語話者に対する日本語漢字指導一『信州大学教育システム研究開発センター紀要』1 pp. 111-121、1999「SUNSを使った留学生に対する日本語指導の可能性」『信州大学教育システム研究開発センター紀要』5 pp.111-118、2000「松本地区外国人留学生が認識する方言」『信州大学留学生センター紀要』1 pp.43-49、2001「タベリ・ミリ等の松本地方での状況一中信地方方言の優しい命令形と勧誘形一」『信州大学留学生センター紀要』2 pp.35-47

③1995「日本の「満州移民」の地を实地調査して」(「日本"満洲"移民地实地調査的思考」孫 継武)「土竜山農民の抗日蜂起」(「土龍山農民抗日起義」孫 継英)「情は結ぶ中日両国人民の日本人孤児問題」(「情系中日両国人民的日本孤児問題」李 茂傑)『戦後50周年日中シンポジウム信州大会 近代日本と「満州」』日中シンポジウム信州実行委員会編・発行、1997「土竜山農民の抗日蜂起」(再録)『近代日本と「偽満州国」』日本社会文学会編 不二出版発行

#### 村田 明

①1992『現代英文法辞典』共著 荒木一雄・安井稔編 三省堂；1996『現代英語正誤辞典』共著 荒木一雄編 研究社出版；1999『英語学用語辞典』共著 荒木一雄編 三省堂

②1984 "Discourse Syntax"『院生論集第13号』119-130 名古屋大学大学院文学研究科；1986 "A Note on Anaphora and Reference" *Linguistics and Philology* 6 285-300 英宝社；1987「二次的述語の副詞的分析」『中部英文学第VIII号』79-92日本英文学会中部地方支部；1989 "Some Remarks on Parasitic Gaps"『岐阜女子大学紀要第18号』91-100 岐阜女子大学；1990「演算子の分布について」『岐阜女子大学紀要第19号』109-115 岐阜女子大学；1991「直接疑問文における演算子移動と空虚移動仮説」『岐阜女子大学紀要第20号』71-78 岐阜女子大学；1993 "Head Deletion Analysis of Matching Free Relatives"『言葉の構造と歴史一荒木一雄博士古希記念論文集』211-226 英潮社；1996 "Antecedent Contained Deletion Not Antecedent Contained"『言語の深層を探ねて一中野弘三博士還暦記念論文集』271-282 英潮社；1998「枝分かれ逆説再考」『岐阜女子大学英文学会誌一澤田助太郎教授退職記念特集』307-318 岐阜女子大学英文学会；2000「日英対照一'go', 'come', 「いく」, 「くる」の異同」『信州大学留学生センター紀要第1号』35-41 信州大学留学生センター；2001「本動詞「いく」, 「くる」と軽動詞「いく」, 「くる」の意味分析」『信州大学留学生センター紀要第2号』1-8 信州大学留学生センター；2001「留学生の日本語作文にみられる誤り」『平成12年度教育改善推進費報告書』1-55 信州大学留学生センター

④1986 *Syntactic Chains* Kenneth J. Safir 1985 Cambridge University Press『英文学研究第六十三巻第二号』402-407；1987 *Barriers* Noam Chomsky 1986 The MIT Press *Linguistics and Philology* 7 123-146共著 晃学出版

⑤1987「演算子の分布について」第5回日本英語学会；1996「形態現象とその説明原理」日本英文学会中部地方支部第48回大会

#### 佐藤 友則

②1995「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育』第5号 P139~154；1996「日本語教育実習は教育観をどのように変えるか一PAC分析を用いた実習生と学習者に対する事例的研究一」『日本語教育』第89号 P13~24；1997「韓国の大学の日本語学習者に対するニーズ分析」『日本学報』(韓国日本学会)第39号 p211~p224；1998「韓国および台湾の日本語学習者のニーズ調査」『東北大学文学部 言語科学論集』第2号 p49~p60；1999「外国人学習者の日本語音声に対する評価基準について一韓国人学習者を対象にして一」『ことばの研究』(長野県ことばの会)第10号 p51~p62；2000 A「信州大学の留学生のニーズ調査一1999年10・11月調査において一」『信州大学留学生センター紀要』第1号 p75~p85；B「日本語学習経験と音声評価基準との関連性について」『信州大学留学生センター紀要』1号 p23~p33；C「自己モニターを利用した音声指導法の提案」『ことばの研究』第11号 p38~p48；2001 A「信州大学の留学生のニーズ調査一2000年10・11月調査において一」『信州大学留学生センター紀要』第2号 p91~p102；B「日本語研修コース修了生の追跡調査一非漢字圏学習者のケーススタディー一」『信州大



学留学生センター紀要』第2号 p103～p112； C「音声評価基準の習得過程に関する考察」『第二言語としての日本語の習得研究』第4号 p134～p149

⑤1994「高さ・長さ・強さが日本語音声の評価に与える影響力について」日本語教育学会 平成6年度 春季大会； 1995「日本語教育実習は教育観をどのように変えるか —PAC分析を用いた実習生と学習者に対する事例的研究—」日本語教育学会 平成7年度 春季大会； 1996「外国人学習者の日本語音声に対する評価基準について —韓国学習者を対象にして—」韓国日本学会 1996年度 冬季学術発表会； 1997「韓国の大学の日本語学習者に対するニーズ分析」韓国日本学会 1997年度 夏季学術発表会； 2000「自己モニターを利用した音声指導法の提案」長野県ことばの会 2000年度 第1回研究発表会； 2001 A「自己モニターを利用した音声指導法 —信州大学留学生センターでの実践例—」日本語教育学会 平成13年度 第1回研究会； B「音声指導授業の試み」第3回日本語音声教育方法研究会

⑥2001年 日本語ボランティア養成講座 講師 3回（3月 中野市・11月 長野市・12月 松本市）

### 金子 泰子

①1980「アメリカの国語教育—入門期のリーディングの指導法を中心に」『教育大学教科教育講座4 国語教育の理論と展開』共著208-226第一法規出版； 1991『台湾・韓国 日本語教育調査報告書』共著24-32,50-55,72-75 信州大学人文学部国語学研究室； 1994「アメリカのリーディング教育」『国語科基本論文集成第5巻 国語科教育課程論（1）教育課程・比較国語教育課程論』共著44-79明治図書出版； 1995『やさしい文章表現法』共著29-123,139-173朝倉書店； 1996『基礎文章表現法』共著60-89,92-107,110-119朝倉書店； 1998「『作文指導論』の周到性に目を開かれる」『野地潤家著作選集別巻2 野地潤家国語教育論を読む』共著264-265明治図書

②1982「アメリカのリーディング教育—入門期の指導法を中心に—」『国語教育学研究誌第4号』50-76大阪教育大学国語教育研究室； 1985「アメリカにおける国語教育の展望—1970年代のREADING—」『国語教育学研究誌第7号』1-49大阪教育大学国語教育研究室； 1985「短期大学における作文指導の試み」『ことばの研究第4号』1-10長野県ことばの会； 1988「短期大学での文章表現指導—短作文（二百文字数制限作文）指導の研究—」『上田女子短期大学紀要11号』11-25； 1989「短期大学での文章表現指導その2—短作文を通して見た文章表現力の展開—」『上田女子短期大学紀要12号』23-47； 1990「信州大学人文学部における日本語教育—日本語授業の実際—」『信州大学人文学部人文科学論集24号』139-155； 1990「短期大学での文章表現指導その3—長作文（意見文）の構想指導で考える力をつける—」『上田女子短期大学紀要13号』29-42； 1991「国際化時代と文章表現指導」『上田女子短期大学紀要14号』11-22； 1992「文章表現指導から見た学生の論理的思考力」『上田女子短期大学紀要15号』9-19； 1993「大学での文章表現指導—その実践と考察—」『国語教育学研究誌第14号 中西一弘先生還暦記念特集』1-15大阪教育大学国語教育研究室； 1994「若者と敬語表現」『上田女子短期大学紀要17号』31-45； 1994「外国人の日本語教育における母語の干渉—主に台湾・韓国の学習者を対象に—」『松高科学研究助成研究報告書第2巻』33-53； 1994「特集 作文—記述前に着目した指導—短作文で記述前指導を」『月刊国語教育研究』28-33日本国語教育学会編； 1996「文章表現指導の課題と方法—学習者とともに—」『ことばの研究第8号』19-34長野県ことばの会； 1997「学び合う文章表現学習」『国語教育学研究誌第18号 小田嶋夫先生還暦記念特集』27-42大阪教育大学国語教育研究室； 1997「長野大学での日本語教育—1993年から1996年までの4年間を振り返る—」『長野大学紀要第19巻第2・3号合併号』56-65； 1999「短期大学での文章表現指導—学習者の実態と願いを知る—」『国語教育学研究誌第20号 中西一弘先生退官記念特集』175-188大阪教育大学国語教育研究室； 1999「小論文の指導その1—学習者の実態調査をもとに指導上の問題点を探る—」『上田女子短期大学紀要22号』35-50； 2001「小論文の指導その2—アンケート分析をもとに指導上の問題点を探る—」『上田女子短期大学紀要24号』9-24

④1998「『真田太平記』の文体を探る」『池波正太郎『真田太平記』研究』3-15上田市社会教育大学文学科ゼミナール； 1999「文体で探る—藤村が写し出そうとしたもの—」『歴史と文学を楽しむ—社会教育大学の20年—』83-85上田市社会教育大学

⑤1977「アメリカの文学教育－オハイオ州コロンバスの公立中学校の場合を中心に－」第53回全国大学国語教育学会； 1978「アメリカの入門期教育」第55回全国大学国語教育学会； 1985「短期大学での文章表現指導」長野県ことばの会第17回研究発表会； 1989「文章表現指導－基本的技能訓練のために－」長野県ことばの会第25回研究発表会； 1990「文章表現指導－短作文で楽しく気軽に－」上小国語研究会講演； 1990「日本語の表現から国際化を考える」上小女教師会研究委員会講演； 1996「文章表現指導の課題と方法－学習者とともに－」長野県ことばの会第34回研究発表会； 1997「短期大学での文章表現指導－短作文から長作文へ－」大阪教育大学第98回国語教育研究会； 1998「文章表現指導のあり方を探る－実践者の立場から－」大阪教育大学第110回国語教育研究会； 1999「短期大学での文章表現指導－学習者の実態調査をもとに指導上の問題点を探る－」大阪教育大学第122回国語教育研究会； 2000「書くことの意義－国語教育と日本語教育－」大阪教育大学第134回国語教育研究会

⑥1992-1995「やさしい文章教室」講師 上田市働く婦人の家；1997-2000日本語ボランティアグループ「にほんごクラブさくら」指導講師 上田市創造館

### 中村 純子

②1996「伊那方言における方言保持の男女差」『日本語研究 第16号』（東京都立大学 国語学研究室）25-38；  
1999「上伊那における推量助動詞-ダラ-の分布」『ことばの研究 第10号』（長野県ことばの会会誌）1-13；  
2000「終助詞における男性語と女性語」『信州大学留学生センター紀要 第1号』1-11； 2001「農学系留学生の言語使用」『信州大学留学生センター紀要 第2号』79-90； 2001「日本語研修コース修了生の追跡調査－非漢字圏学習者のケーススタディー－」共著 『信州大学留学生センター紀要 第2号』103-112

⑤1993「伊那方言の標準語化と性差」長野県ことばの会 第31回研究発表会； 1997「伊那方言における方言保持の男女差」第69回変異理論研究会； 2000「日本語教育に求められているもの－受け入れ側の視点から」長野県ことばの会 平成11年度研究発表会

⑥2001『農学系論文で使用される文末表現と文型－森林経営の論文とその他の農学系との比較から－』平成12年度信州大学留学生センター日本語研修コース・専門分野の論文の読解・作文指導のための調査報告書 1-36

⑥1992-1995「やさしい文章教室」講師上田市働く婦人の家；1997-2000日本語ボランティアグループ「にほんごクラブさくら」指導講師上田市創造館

### 合津 美穂

②1989「奥山美樹さん（浜更岸地区・昭和6年生）の場合」『北方科学調査研究報告－北方圏の自然と文化の研究－9・10号』（旧姓・藤井で発表）27-35 筑波大学； 1992「職場における相互研修の取り組みについて」『日本語教育現場における教師の自己・相互研修』（旧姓・藤井で発表）68-70 国立国語研究所日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室； 1997「受け入れ教室からみた日本語教育実習」『ことばの研究第9号』25-37 長野県ことばの会； 1999「日本統治時代における「台湾人」の日本語使用－「台湾人」職員に対する日本語使用の事例を中心に－」『ことばの研究第10号』14-26 長野県ことばの会； 2000「日本統治時代における台北市在住「台湾人」の日本語使用－社会的変種の使用について－」『信州大学留学生センター紀要第1号』51-62 信州大学留学生センター； 2000「中級レベルへの橋渡しを目指した作文指導－作文の分析を通じて－」『平成11年度信州大学外国人留学生日本語補講松本地区・初級コース作文指導報告書』1-22 信州大学留学生センター； 2001「日本統治時代の台湾における日本語意識－漢族系台湾人を対象として－」『信州大学留学生センター紀要第2号』61-77 信州大学留学生センター； 2001「日本語研修コース修了生の追跡調査－非漢字圏学習者のケーススタディー」『信州大学留学生センター紀要第2号』共著 103-112 信州大学留学生センター⑤1992「職場における相互研修の取り組みについて」（旧姓・藤井で発表）国立国語研究所平成4年度日本語教育夏季研修名古屋会場「教師の自己・相互研修－その具体的方法－」； 1999「日本統治時代における「台湾人」の日本語使用－「台湾人」職員に対する日本語使用の事例を中心に－」長野県ことばの会平成10年度冬季研究発表会； 1999「日本統治時代における「台湾人」

の日本語学習観とその背景－「台湾人」に対する聞き取り調査を通じて－」平成11年度日本語教育学会秋季大会； 2001「リソースとしての日本語教育実習」共同発表 日本語教育方法研究会第17回研究会  
⑥2001「日本語ボランティア研修講師を担当して」信州大学留学生センター教育・研究シンポジウム『留学生センターの日本語教育と地域間の連携』ワークショップ「地域の日本語教育との連携」

#### 今村 一子

②1976 "Contrastive Analysis Between English and Japanese Relative Clause [1 (I~IV)]"『信州大学教育学部紀要第35号』/1978『英語学論説資料 第10号』論説資料保存会； 1977 "Contrastive Analysis Between English and Japanese Relative Clause [2 (V~VI)]"『信州大学教育学部紀要 第36号』/1979『英語学論説資料 第11号』論説資料保存会； 1977 "Interrogatives Through FOCUS"『信州大学教育学部紀要 第37号』； 1994 "English Present Perfect in Relation to Japanese and Its Inherent Problems in Teaching and Learning"『北海道武蔵女子短期大学紀要第26号』

#### 青柳にし紀

②2000「イントネーションからみた『はい』の談話機能」『ことばの研究 第11号』25-37； 2001「『はい』と『ええ』の意味・機能—音声、イントネーションの視点から」『信州大学留学生センター紀要 第2号』23-34； 2001「日韓両国学生の初対面場面における話題の推移」『日本語教育研究』46-59； 2001「日韓交流前後における日本語教育学専攻学生の意識変容」『日本語教育研究』60-72  
⑤1998「対話における『ハイ』のはたらき」第39回長野県ことばの会研究発表会； 2000「『はい』と『はあ』の意味・用法」第42回長野県ことばの会研究発表会

#### 山本もと子

②2000「イギリスの公教育における日本語教育」『信州大学留学生センター紀要 第1号』63-74； 2001「接続助詞「から」と「ので」の違い—「丁寧さ」による分析—」『信州大学留学生センター紀要 第2号』9-22.

#### 高石久美子

①1999『かんじだいすき(一)』共著 社団法人国際日本語普及協会； 2000『かんじだいすき(二)』共著 社団法人国際日本語普及協会； 1997『生活の中で見る この標識・このことば』協力 社団法人国際日本語普及協会； 1997『やさしい日本語問題集』協力 社団法人国際日本語普及協会；  
②1994「「算数」の教科学習を助ける日本語テキスト試案」『日本語教育83号』73-84 共著； 1998「「ご苦労様」と「お疲れ様」の使い方について」『JALT 日本語教育論集第3号』75-83  
⑤1998「グループ討議形式によって進めるボランティア日本語教師養成講座の試み」平成10年度第9回日本語教育学会研究集会(広島)； 1999「ボランティア日本語教室のためのローカルテキストの作成」共同 平成11年度日本語教育学会秋季大会(岡山)； 1999「外国人・児童生徒用日本語テキスト『こどもの日本語』の作成と今後の課題」共同 平成11年度第8回日本語教育学会研究集会(山口)； 2000「外国人児童・生徒のための漢字教材」共同 韓国日本学会・日本語教育学会の共催による国際シンポジウム(ソウル)

信州大学留学生センター年報  
第2号

編集担当者 村田 明・佐藤友則

平成14年3月 発行

発行所 信州大学留学生センター

〒390-8621 松本市旭3-1-1

TEL (0263)37-2185

FAX (0263)37-2181

<http://isc.shinshu-u.ac.jp>